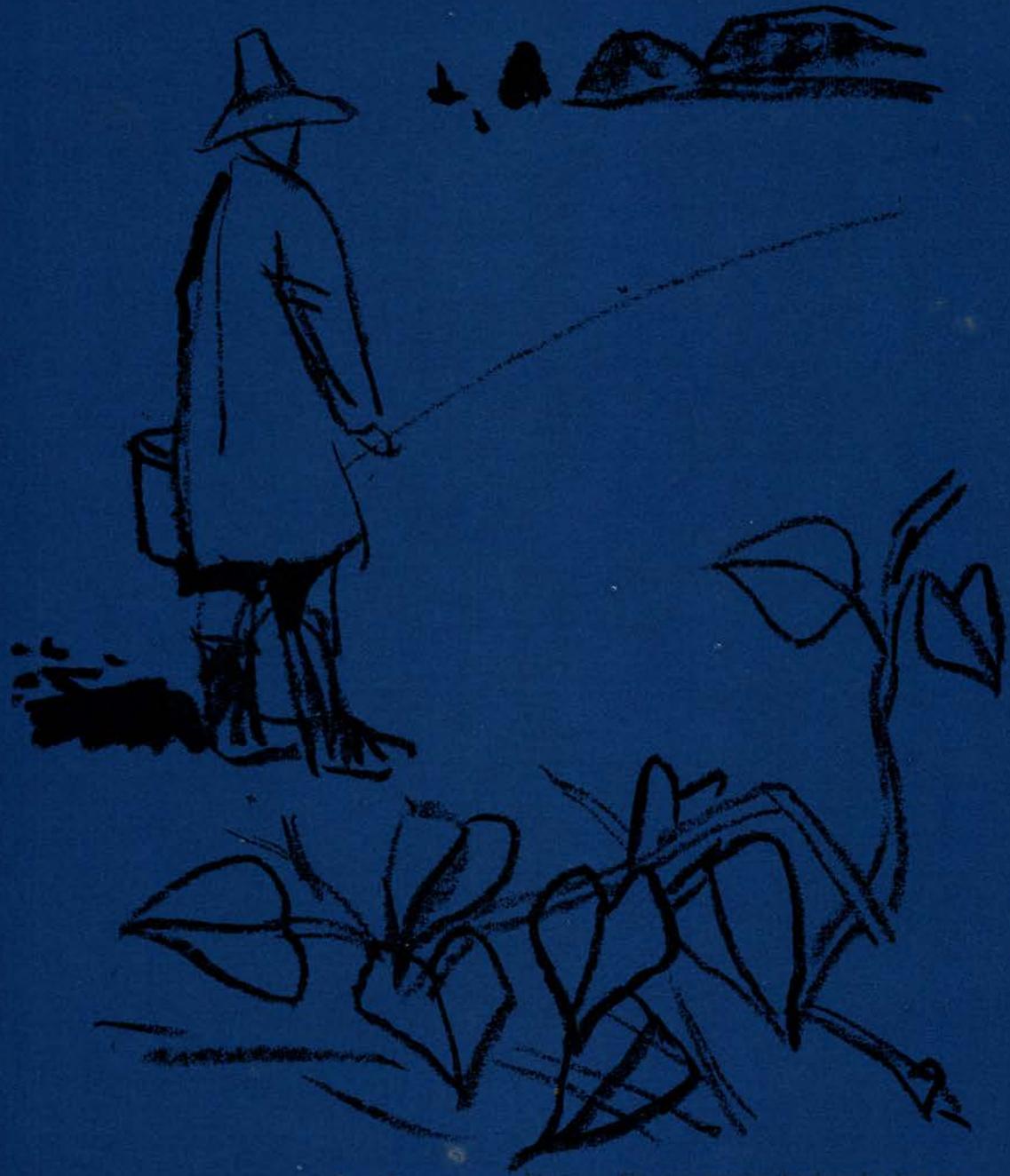


証の雑記



麻生路郎☆主筆

六月号

No. 421

Pensuj flugaa trans la land - imon
THE SENRYU ZASSHI

いよいよ迫る川柳の祭典！
7月8日(日)午後一時



川柳まつり

情熱

情熱

選 郎 路 生 麻
(切・六月末日本社着便句)
(袋裏面に支部名雅号明記)

会場 四天王寺本坊 (電話(七七二)〇〇六六番)
天王寺区元町一七

司 会 松 江 梅 里

開会の辞 若 本 多 久 志
換 拶 中 島 生 々 庵

柳 話 麻 生 路 郎

講 演 「空想力について」 小 野 十 三 郎
兼 題 「喜 び」 (三句) 中 島 生 々 庵 選

「声」 (三句) 北 川 春 渠 選
「庭」 (三句) 清 水 白 柳 選
「素 足」 (三句) 西 尾 榮 選

出席者も兼題全部・各題句箋別紙・裏面に雅号
明記六月末日本社着便のこと

席 題 当日三題発表(各題三句)

★特別課題 「情 熱」発表 麻 生 路 郎 選

呈 賞 ★各題天人・各題天位から路郎選により
不朽洞賞

★特別課題発表者に高部賞 ★優勝者高部賞の会に大感謝状を贈る。
(優勝者は明年川柳まつり当日返還、川柳支部、俳文部に贈らない
仕方が優勝した場合は川柳本社の特賞となる)

余 興 有志 諸 家
閉会の辞 土 井 文 蝶

会 費 百五十円 (参加者全部におみやげ進呈)
懇親宴 会費五百円 (同会場において5時半から7
時までの予定)

★投句だけの方も郵券五十円同封(切6
月末日)

★投句だけの方も郵券五十円同封(切6
月末日)

大阪市住吉区万代西5丁目25番地

川 柳 雑 誌 社

電・大阪 (671) 6081

川 雑 踊 り

須崎豆秋 作詞
若柳吉艶重 振付
丸尾潮花 指導
青森市陣 麻生アトト

(1)

路郎先生の誕生日ヨイヨイ
歳を召すたび若くなる
川柳祭だ よいとさのさ
手拍子そろえて踊ろうよ

サノヨイヨイ

(2)

月が出た出た月が出たヨイヨイ
不朽洞から月が出た
あんまりお月さんがでかいので
世界の隅まで照らすだろ

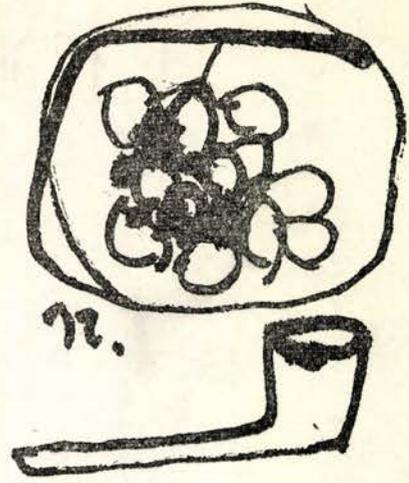
サノヨイヨイ

(3)

一句出た出た一句出たヨイヨイ
ぎよっとするよな句が出来た
あんまり選者が辛いので
天かと思たら没だった

サノヨイヨイ

(炭坑節で唄って下さい)



柳川 名句と難句

麻生路郎

〔三二四〕
万葉も横書きにして講義され

(春雄)

近頃は役所の文書類が皆横書きだ。知事の出す表彰状なども横書きだが、貰った人が表彰状をいただいたような感じがいたしませんと云っていた。表彰状をもらう人たちは大い明治人間なので、横書の表彰状にはなすめないのだ。一寸斯うした押しつけはどうかと思われ。矢張り金の菊の紋章のついた縦書の表彰状が嬉しいのではあるまいか。

学者も早くから横書きをしていた。これは数字や外語を入れるのに便利だから、自然にその方向にむかったものである。最近ある文学博士の万葉の講義をきく機会に出会ったが、なるほど、この句のように、万葉の講義を横書にされていた。が、別におかしきはなかった。しかし、万葉仮名にひらかなで訓みをつけたガリ版は横書きでは

なかった。

色紙や短冊となると、横書では今のところ、ムードが出ないうらみがあるのではなからうか。慣れば、どんなおかしなものでも、それで通うって行く世の中ではあるが。

〔三二五〕
坪一万のたんぼに草をしげらせる

(旭童)

田圃が、いつの間にかやらの宅地になって、工場やビルが建つ。ゴルフ場になる。

それで、田圃が坪一万円にもなる。そんな田圃へ、三カ月も半カ年もかかって、野菜や米を作ったところで、幾らの所得になると云うのだ。バカらしくて百姓にする気にもならない。

うっちゃらかして、田圃の値上りを待つ百姓がそここに出来た。その結果が、坪一万円の田圃に草をしげらせることになったのである。

百姓のみなが昔、坪一万円の田圃に平気で草をしげらせているわけではなく、そのしげった草を、情けないことだと眺め入っている百姓のいることを、この句から類推するとすると、政治の貧困さをつくづくと思わされるのである。

〔三二六〕
万歳万歳淋しさの残りける

(蕨風子)

万歳万歳は戦争につきものだが、必らずしも戦争の時に限ったわけではない。

多くの人達が、海外旅行を厭のプラットや港の棧橋に見送ったりする時にも一せいに「万歳」を叫ぶし、お祝いの宴席の最終にも「万歳」を三唱して散会する。多数集めた場合、黙って散って行くわけにもゆかぬので、これでこの会合を終わりますと云う区切りをつけるためにも、この「万歳」が用いられる。至って便利のいい言葉である。

この句はどんな場合に叫ばれた「万歳」か判らないが、やはり多数集合した時に、多数の人たちに和して、万歳万歳を叫んだが、心からのよこごびからはとばしり出た万歳でなく、尻細がりになってゆく自分の声に、何んとなく淋びしさを感じたのである。いいネライの句だ。

〔三二七〕

割箸を割れば汚取へつづく道

(葵丘)

何んとか、かんとか云う名目で、料理屋や温泉へ招待されるが、ウツカリ宴席の割箸を割ると、そこから汚職の道へつづいて、引ッ返せぬことがあると詠んだもの。

「割箸を割れば」の上八音字がこの句のヤマである。ここから宴席の情景がスラスラと浮かびあがってくる。

選挙違反の十中八九までが、矢張り割箸を割った連中である。

〔三二八〕

亡き母の分まで叱る父となり

(花村)

春まだ浅い頃、最愛の妻を喪った作者の実感の句である。この句を選んだ筆者は涙なくしてこの句を読むことが出来なかった記憶が蘇がえって来る。

告別式の日に、おきな子を二人抱えて挨拶をしていた傷ましい姿には顔をそむけないうけにいかなかった。愛児に対して「亡き母の分まで叱る」とは、この上の表現が

あるだろうか。

〔三二九〕

スト応援運動会へ行く如し

(むじな)

ある会社の工員に、組合をつくらし、その後団体がストをさせ、その団体の応援でとうとう会社を潰がしてしまつた実例があるが、この句はストの応援ではあるが、それほど激しいものではないらしい。狩り出されたので、やむを得ずハチ巻を締められた学校の先生方が想像される。「運動会へ行く如し」が、その情景を物語っているではないか。

〔三三〇〕

続西成界わい

一家心中テレビの月賦まだ残り

(満潮)

一家心中が、必ずしも西成界わいの最大特徴でもないし、心中をした家のテレビの月賦がまだ残っている訳でもないが、他の地域から見ればそうしたアファが比較的が多いので、この句の穿ちが成立するのである。この句の内容は最大の悲劇であるが、その割に悲哀感が迫って来ないことである。それはテレビの月賦の方が、一家心中よりも、より先きに具体的に読む人の心を掴むからであろう。

〔三三一〕

病人の抵抗箸に手をつけず

(鳴枕)

「せっかく、こさえたのだから、少しぐらい喰べてごらん」

「……。」

「しっかりと喰べないと、箸が遅いそうですよ」

と云つても、何が気にいらぬのか、病人は箸に手をつけようとしぬ。病人としてこれが最大の抵抗である。

長病らしい病人の不満は、言葉には云いあらわせないものがある。不甲斐ない自分に対する不満もある。ムリとは知りながら、それを看護するものにあたり散らす場合が多いのだ。そうした病人心理を巧みにとらえている。

〔三三二〕

鬼が笑うことやった教科書タダ

(好祐)

口に税金がかからないので、政治屋さんによく口から出まかせのことを云う。

「父兄の負担を軽くするために来年度から小、中学の教科書はすべてタダにする」と云つたことを平気で広言する。それは来年に選挙改正が行われるからである。一票でも余計に稼ごうと思えば約束の出来ないことでも平気で約束するのが彼等の常である。この句は「来年のことを云えば鬼が笑う」と云う諺を引用したもので、「ことやつた」は「ことだった」という意味の大阪弁。

〔三三三〕

書いたものついで見ないが著述業

(八九寸)

名刺には著述業としてあるが、どんな著

述をしているのか、その人の著述らしいものを一度も見たことがないと皮肉つた句だ。選挙の時など、よくそんな名刺をもらうものだが、立候補者にも、尋卒、職業は著述業などと麗々しく書いている人がいるものだ。

〔三三四〕

パチンコで雨のあがったのも知らず

(宗太郎)

日常茶飯事の句だと云えば云えぬこともないが、何んとなく捨てがたい句だ。雨やどりのつもりで飛び込んだパチンコではあるが、思わぬ当りに時の経つのが判らなかつたのである。「雨のあがったのも知らず」で、パチンコ屋での雰囲気を巧く出している。

〔三三五〕

奥さまはここで看護婦してた人

(呑風)

他人は何んとかかんとか云いたいものである。医者と看護婦とが、恋愛から結びつこうが、幾らかの便宜上から、看護婦が奥様になるうが、それは水が低きにつくようなもので散えてフシギでも何んでもない。

それをとりあげて、一句にまとめたところに、この

句の存在価値がある。句の構成は見たままであり、思ったままを述べたもの、内容は好奇心と罔焼きと入れ交した複雑な心理が詠まれている。この句の場合、医者と看護婦との年齢の開きが、感じられるのも、斯うした句の生まれる要因をなしているようだ。

〔三三六〕

公僕は冷暖房で事務をとり

(七面山)

私たち庶民は、暑かろうが、寒かろうが、二週間か三週間の茅屋にその日その日の営みを続けているのであるが、私たちの公僕は冬は暖房、夏は冷房の堂々たる庁舎におさまって、事務をとっていると云うのである。

そんなに、ひがむなと云ってやりたいが、それに違いないとも云える。

ビールは楽しいものです
人の心を明るくします
和やかな雰囲気をつくります

公僕は冷暖房で事務をとり

ビールはアサヒ



川柳塔

大阪市 市場 没食子

木の芽あえ旦那もいける口でんな

日本の縮図占いはやりにて

停年退職す 四句

年金に頼る身となり急に老け

停退をお受けして来て割りきれず

退職金禿げた頭をなでてみる

引継をすまし立飲みして帰り

二男福井大工学部入学

停退へ学費下宿費のしかかり

西宮市 若本 多久志

鬼になれとは検事になった婿に言い

電気釜女房が炊いたことになり

暴力と言わんストへ義憤する

東京よりドライブ

朝発ちの五十三次京に着き

大阪市 正本 水客

日当りがよすぎて二階降りてくる

シャボテンを集めて家に落着く気

追い越してみる興味さえわいてこず

清貧という名で褒めたことにされ

兵庫県 小西 無鬼

某氏銀婚

振り返る二十五年の段梯子

まかしときと云う子へ親は未だ案じ

大阪市 北川 春葉

カメラもう同じ顔には飽きが来る

黄色いママさん妊娠をおして出る

東京出張

たかが東京へ行くに靴まで新調し

ワイマル 羽佐 間 柳葉

抵抗と刺戟が欲しいテンエージャ

多数決陣笠組も眩を張る

酔ったから言うのじゃないと纏れ出し

堺市 吉田 圭井堂

遺体まだ掘れず夏山近くなり

ゼロの日が初号活字で載る不思議

額面を割っても ゴルフ キャデラック

四選さすほど人材にことを欠き

防府市 長野 井蛙

利用価値先ず菓子折で脈を引き

旅のうさスリの話術に引っかけ

引きつけて女見事な背負い投げ

岡山県 直原 七面山

帯しめて女こころの安らぎを

石に表情ありと称えし詩人逝く

結婚してくれよへ女軽う落ち

旅の人から隣家の不和を教えられ

豊中市 足立 春雄

新入社行って来てみときき出され

会費未納がメインでスピーチしています

始球式だけに部長は顔を見せ

倉敷市 木村 千容

お料理は目で味うて口にせず

得手勝手ばかり仰しやる御曹子

加賀市 野村 味平

うろたえて重ね着をする春の雨

春闘の五千円のと花咲けど

眼帯をすればしたよとからかわれ

大阪市 木村 水洞

風邪気味も娘の縁談へ寝て居れず

縁談へ無理は承知の予算組み

ぎこちない手つきでもよい妻の酌

大阪市 真鍋 一瓢

もう風がこわい白髪のタンポポよ



街の春脚より細きズボンにて

いつもビールが冷えとりそうな冷蔵庫
百万円のニューカーで来てけちを云う

大阪市 後藤 梅志

花はいま盛りなるらし恩師訪う

拝金宗ならずとも金は拝むべし

ひとりで墓参しゃがんで草をとり

使い古したわが肉体に感謝する

画を描いている人にして鋭い目

白ナンバーばかりズラリと控訴院

米子市 小西 雄々

臨月というに夫は山で死に

買物に行くふりをして墮して来

釘打てば日曜大工板が割れ

大阪市 山川 阿茶

石仏に荷物預けたピクニック

臍脂着ていつまで生きる気ままして

二人くらししてトランジスター二つもち

大阪市 金井 文秋

しきたりの梓へ落ち込む気の弱さ

初任給パパのネクタイ買うてくれ

手料理がインスタントの味に負け

記念写真わりに美男も美女も居ず

加賀市 那谷 光郎

進物を儀礼がちよっぴり押し戻し

故郷の駅に手錠が待っていた

うっぶんを屋台の灯では捨て切れず

婆さんの法話聞く口何か喰べ

招待席まだ空いたまま幕が開き

下関市 桜川 不水

春雲の流れる下で嘘の恋

夜桜へ皮相な恋を捨てて来る

二たりにはただ一本でいいさくら

岡山市 浜田 久米雄

花見酒むしろが濡れるのにまかせ

満開の横を出て行く定期券

出雲市 尼 緑之助

マスコミがさみしがらせる老人論

法要に博士になったのも参じ

大阪市 水谷 竹莊

ロボットのよう判押す出勤簿

呼び捨てにしてと女に惚れられる

博多にて

特急へ博多人形と二人乗る

ツイストで末っ子一家を笑わせる

物価高国民のせいにしてうそぶけり

琴の音にアプレ口笛ふいて過ぎ

尼崎市 小林 文月

スト止みて助役ゆっくり湯につかり

奈良県 飯降 白香

借れるだけ借って死んだが憎まれず

もててるとうぬぼれた彼の奉仕ぶり

失策がクビを思わす年になり

奈良県 西辻 竹青

かる胸もなく泣いとれず未亡人

退職す

功成ったわけでもないが四十年

岡山県 福島 鉄児

生きている見本ギブスに明ける日々

岡山市 服部 十九平

幼稚園最初は保母が鬼になり

貧しさも同じレベルで村平和

テレビ出演拒みつづけて芸の鬼

西宮市 若林 草右

ピラ剣がす道具も揃えストを待ち

兎追いし山河あとなしゴルフ場

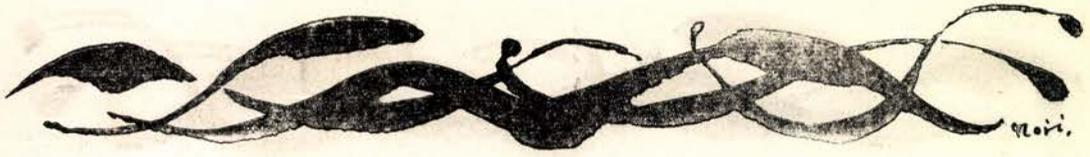
借金の固まりのような家が建ち

窓下へ鉢を並べる趣味をもち

勿体ない暮しするよと故郷の母

岡山県 田村 藤波

冷感病じう控つめりもりの所し
いんま
富の天来せれか美人の身なり用き



狂い酒もろく

番犬の代理もつとめている男

心身を子にうちこんで悔とせず

花咲いて幹事の腕の見せどころ

児島市 本田恵二朗

健康法聞けばよくよくよすなと言う

誘惑に負けまいビールを吹き

京都府 松川 杜的

ビルの上から眺める女の歩巾

初伝紋のお琴を外人褒めてくれ

堺市 高崎 雄声

変りばえせぬ顔さげて旅帰り

いんぎん無礼今成金にて候

貸倒れ心配してるよい身分

島根県 藤井 明朗

花吹雪今宵限りの恋と知る

日曜へ初孫の守り持って来る

広告を読ませほんほり無表情

婦人会浮気封じの話もし

だまされていても母の目は笑い

岡山県 永松 東岸

引きとった息をも一度たしかめる

偉い人の随行金魚の糞に似て

倉敷市 野田 素身郎

生理的現象デモの列から出

春うららポンポンと旨判

懐具合察して歩きましようと言う

レギュラーが病気ドラマの筋を変え

大阪市 木村 十悟

天秤にかけても金の方へ落ち

あそんでで食えるるとこ迄身を落し

儲けたら飲め食えスラムもいい所

メモ通りテレビ料理が出来損ね

大阪市 伊達 塚子

花の下唄が流れる鉄の足

法華寺にて

落花しきり取付ぐ尼のうら若く

大阪市 不二田 一三夫

教師が婦人だったらしニッポン語

病人が持てば風船弱々し

芦屋市 丸川 初甫

初老もう女の魅力忘れかけ

盆栽の新芽をつんで古稀近し

いい智恵が浮んでベタル軽く踏む

紅一点お酌をさされ唄わされ

唐津市 新岡 回天子

ニコヨンの昼寝するとこ猫も知り

岡山県 池田 古心

貧農の生活浮気もなくやつれ

大阪府 早川 清生

大学の二部出て校歌など知らず

土地発展した後 もとの地主いず

仲居に出 病夫に話すこと多し

半生を夜毎に妻の肩もんで

堺市 辻 圭水

良縁を易者ごときにまどわされ

母乗せた霊柩車に手を振る子

無駄話さえ声優は問をとり

岡山県 野々口 美舟

職権を振り廻された四月馬鹿

教員の弱き流れのあわに似る

タンゴから政党に変わっているラジオ

西宮市 小浜 牧人

貧しくとも倅せを知り花も買う

病人の春は窓から見てるだけ

浪人の子の晩成を信じてい

月おぼろ待つほどもなく女来る

名古屋 菱田 満秋

案の定火元ひとりが焼け太り

春の陽の中で白いが素足なり

池田市 前川 左文字

平の抵抗 株を研究し

長男高校入学



合格を三度確認して帰る

鳥取県 田中蛙眠子

芋虫の型で眠るも夜の汽車

合格の公衆電話へ列作り

社長室ふんぞりかえるのは労組

西宮市 野呂鶯汀

岡山県 池上知恵美

名士歌舞伎「白浪五人男公演」

泣くことも恋を勝ちとる手とわかり

待ちぼうけ風の中なるつくつくし

名士芸科白のとりにも拍手

家族皆妻の監督下におかれ

長生きの手相へ先が案じられ

アイシャドーひけばワイフがパンプめき

同じ日に同じ処にいて会えず

大阪市 橋高薫風子

神戸市 仲 どんたく

西宮市 樋口舟遊

老醜の土筆ほどにはなけれども

春なれやランデブーの父デートの娘

案内も一緒に覗くお菊井戸

花の散るすがたところろ女にも

日曜出勤えらいところで見つけられ

パチンコ屋ごときに花輪まで立てて

香林氏夫妻を思う

じらすのもテクニクかや又待たし

大病を酒の肴にまで話し

淀川の土筆送らんすべもなし

江戸にて

大病を出たから手紙けなされる

奈良市 宮口笛生

紅灯の神田明神 花吹雪

大阪府 石倉旅風

よいよいよい赤ちゃん春へ三步五歩

平田市 久家代仕男

本棚の無い寂しさの電化器具

寝ころべば芝生の緑ぬくい奈良

異動時期の塵を捨てて待ち

金二万危い危い免許証

小蟹の抵抗足をもぎ取られ

百姓で生きよと親ものたまわず

リバイバル明治気質もキツと来る

大阪市 榎本落児

株式会社になってものれん捨てられず

大阪府 魚住満潮

見本市僕は煙草を買っただけ

君が代は唱わずじまいで大学出

笑いながら他人が寄って棺を出し

雨無情こっちは借着のモーニング

窓口は公僕としてへつらわす

嘘も方便一家心中をすると云う

大阪市 西川晃

孫の様な娘に職安で世話になり

病人の耳へガス代電気代

金魚売り明治の御代の声を出す

あんな子が少年Aとは思われず

一網打尽チンピラばかりなり

顔だけで笑う生きるための変節

引越して来た人二号で小鳥飼

肩を叩かれ千円になる仕事

御主人に做って猫も欠伸する

大阪の娘等を訪う

急救車夫婦喧嘩に走らされ

つい五十いまいまにと未だおもう

大阪弁既に孫達板につき

拝み屋の女房に亭主徒食なわれ



特高に追いまわされし若き日よ

愛媛県 村上旭童

飲みに来いとは桜いわぬなり

出稼ぎへ今年も花が咲いて散り

この山にこんな桜があつた春

いつからか愚痴も忘れて老い給い

倉吉市 大前鳴枕

ちやほやしてくれたに臥ればそっぽ向き

病氣まで撮られてうれし春の恋

神戸市 傍島静馬

歯を治すよりも指輪の欲しい妻

入学式自力ではいった顔してる

笠岡市 木山遠二

憲法で子も孫も居ぬ家となり

菜種の色知って来たのか黄ナちようちよ

翌る日の軒に日の丸ばんやりし

手枕のまんまで阿弥陀くじを引き

大阪市 中谷ハナ子

若いんだ土曜はデートの日に決める

春ですと父も脊広を新調し

布施市 森下愛論

一皿の豆ホステスが取り囲み

誘惑の扉開けようか開けようか

大阪市 河井庸佑

私鉄スト怒りの声だけ記事となり

裏口を知って勉強に実がいらず

大阪府 谷沢好祐

質通いしててアンテナ降されず

行啓は交通癩痺を残し済み

舌は飲め胃はやめとけと云うけれど

泉大津市 高津徹也

白樺を見やる目付きが恋を迫り

青だたみ今日は見合いににらまれて

愛媛県 榎紫光

専務室からB Gが遅すぎる

衣食住足って女はやせたがり

植木屋の鉄首でも切れそうな

無免許の方がスピード出したがり

青森県 工藤甲吉

考える人になつて無一文

俺は蜂かよ月月火木金金

トラバ蟹みたいな脚でミスは立ち

税務署で美人偉力を発揮する

寝るだけへ女心の化粧水

明治大正は五玉を探させる

松江市 小林孤呂二

花に水やること忘れて来た連休

ツイストに南の島を懐しむ

いなびかりようやく膝の上に乗る

団体はお疲れ様でそれっきり

松江市 舟木与根一

栄転と世辞にも云えず口ごもり

力強い絶筆がありなお悲し

合併合議場土くさくさなり

豊中市 林夢虹

たましいが置き忘れられてあり聖書徴び

たましいを捨てた私が愛される

針持つてようやく妄想からのがれ

西宮市 山本一傘

癪たらないもの一つに宝籤

大阪市 今西生薑

総領へ棟木の古さのしかり

下馬評にいつも洩れてる生字引

京都市 室井八九寸

たっぷりなお布施へ誂経リズムカル

取巻きからお祭りのよな葬儀にて

「お」の一字微妙な婦人社交界

専門医へ行けと急所をはぐらかし

岡山県 横山一声

植木みな伸び放だいの旧家なり

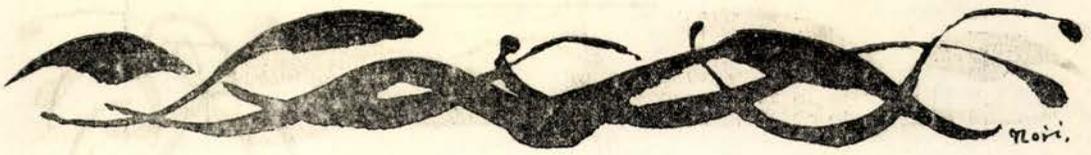
パパの留守番へ二合びんが買ってあり

小松市 関戸宗太郎

税務署で病後と見えぬ程ねばり

一等へ移る社長族に踏まれ

予約した宿ののぼりが見当らず



停年へ成り歩のような廻り椅子

同志あいまみえ赤旗楽しそ

石川県 高 山 涼 髪

資本家がどうのこうのと花も見ず

土堤を行くアベックに海近くなり

上を向いて歩こうどうせ平だもの

散り急ぐ花を戦盲意識する

話題なくなつてキッスを許したり

山口県 安平次 弘道

歴代の村長額から村政を見る

若旦那の珍芸学資が注ぎこまれ

ままならぬものに大火の後の雨

声たてて読まにゃ勉強とみてくれず

とげとげしいものに四十才の処女

事務服の下へ逢う日のネットレス

和泉市 井阪東天紅

京ことは加茂の流れもゆるくみえ

貸衣裳ながら振袖よく似合い

小松市 浅野芳朗

絶景へ貨物列車がスレ違い

おちましたなどと五合も飲んでゆき

停年のそれから白髪染めもせず

はしなくもラッシュ痴漢の気が判り

喰われないというポーナスで酔っ払い

諫早市 川岡靈眼子

我と妻汽車のルールに似てわびし

三才という重量を肩に乗せ

見られてると知らず金魚豊かなり

恩師を想う

よろめきもなくして恩師の老い給い

鋭利なる刃物に勝る涙ぐみ

香川県 石井かな

かんづめがころころ自炊の楽屋うら

およばれもあつて自炊も休みがち

貝塚市 杉本一鶴

軒下の雀も春の顔で来る

食えるゆとり出来たら胃袋受け付

絶安の夢は我が家をかけまわる

熱発へお天道様が黄に見え

同
舟
近
詠

長野県 高峰柳児

無芸ただ席の隅まで酌きまわり

サングラスすぐにも凄味きかせそう

喋られただけで赤電話切れちまい

念押ししてアルサロマッチくれるなり

東京都 阿部佐保蘭

次男一橋大へ入学

久しぶり仰ぐ母校の時計台

合格の番号縦に横に撮り

ほのほの子の合格の中にいる

和歌山市 秋月宏方

丹前は僕のレジャーを待ってくれ

専卒にしては成功小企業

帆前掛で働く社長たかが知れ

今治市 長野文庫

例外の例を押切る実力者

欠点がある訳でない嫁きおくれ

知った人居ぬ旅先で飲む気楽

飯よりも好きと三振ばかりなり

大洲市 米沢暁明

一万円女将見むきもせずに酌ぎ

別荘へまで雑音が追いかける

B・Gの日記にいやな課長さん

出迎への訛なつかしお国入り

旅たのし訛りをちよいと真似てみる

もう汽車が来ると打切る赤電話

父さんのスト子供等はうれしがり

迎え傘来る由もなし共稼ぎ

老眼鏡探して貰う孫を呼び

仲人の袴をとればいける口

新居浜市 月原宵明



川柳の形式について

川柳の体改善は是非か

—現在の定型でよいか、どうかを
異色ある方々のご意見をうかが
た。(順不同)

定型への執着

布部 幸男

「川柳の形式について」その良否や行き方をおたすねにあずかって、はじめて自分自身で、これまでそのことに無関心であったことに気がついたようなわけだ。

自分の歩いている川柳の道のことでもあり、またそれを「川柳雑誌」が採りあげて一つの話題を構成するというからには、きつこの川柳形式という問題が現在の柳壇の一つの方向を示唆するなにかを提示しているということなのでしょう。

俳諧を発足点としている「川柳」が当然の宿命として背負うてきた五七五のいわゆる定型といわれる詩型を踏襲してきている

ことは当然のことなのですが、今その形式について、もし何らかの新らしい運動と理由があるなら、またどうしてもこれまでの形式によっては今只今の句材を表現するのに不便不適合とするならば私はまずそのよって来た理由や動因を糺明する方が先決となる順序になります。こんなことをいっていると、なんだみんな知っているくせに白っぽくされて——と、誰かにいわれそうですが、正直いって私自身の四十年程の作句体験から考えて、いまさら「川柳の形式」にまで触れるような、つきつめた不自由さも、不自然さもありません。いうなれば「形式論」に関する限りでは、旧いとか新らしいとかそんな観念を超越しているつもりです。

定型派などという目じるしでものをいっている人たちのこともよく見ているし、そのいっている焦点もよく合点しているつもりですが、もう一つそれらの理由に決定打を見つけそこなっているというのでしょうか。

数多い短詩文芸の中にあつて、川柳のもっている要素については、いろいろと論議されたこともあり現在でも休みなく続けられているのですが、その要素と形式とのつながりに対するみんなの考え方が統一されていないようです。私ひとりの考え方がというとなら、そのいろいろの川柳になる要素、つまり句材を容れるもの、あるいはそれを生かし、それに生命感をもたせるため、一つの構成形式として、現在行われている、または川柳発生以来の十七文字を基調とした句の形式が、もっとも適しているようであり、さらにまたその構成形式の基調が守られるというその一つのポイントが、川柳伝統の生命線であるように思っています。

つまり俳諧形式の中にあつて、それを基調としてリズムのなかにあつてこそ、川柳の生命感が躍動するということになりま

「女——」でもいいわけですが。最近自由律俳句に「影も目高」という六文字のものが発表されたり、二十五文字にもあまるものもあります。さらに短歌の方でも（歌は省略しますが）四十五文字にもおよぶ作品が、土岐善麿氏によって「短歌研究」四月号に発表（文芸春秋五月号による）されたそうです。もちろん文芸誌上でも善麿の老いて衰えざるシャバケとヤヌはしています

が、これは事実です。

私にはそんなシャバケもなく、稚気もなく川柳が川柳であらねばならぬという目標に、十七文字の基調を確く守ってゆきたいと思つています。そんな固苦しい信条をもちつづけている私でさえ、時に土岐善麿さんのひそみにならつて、字余りや字足らずに浮身をやつすこともあります。その場合にはそれなりに、そうなくてはならぬ、十七文字の基調に対しての一つの抵抗によつて、やはり基本的な定型への執着を示しているという姿を見せているつもりなのであります。まあそんなところが私の「川柳の形式」に対する立場のようでもあります。

なんぞ便利な十 七音の綴り方

石原青竜刀

川柳の形式が現在のものによいか、どうかという問題に対して、僕には複雑な思考

がある。前句附から起つた万句合せ中から、一句として独立させて鑑賞にたえるものを選び出した「柳多留」の作品が、五七五調十七音であるという、単純な理由。それにすこしの疑いもたず、あたまから「川柳は五七五調十七音の文芸である」ときめてかかり、何十年一日のごとく、その型(あるいはワク)にはめこむことのみを作句と心得ている先生がた、およびその門弟たち、これが現在量的に圧倒的勢力を占めている伝統派(いわゆる本格川柳派をふくむ)である。問題提出者のいうところの「現在の形式」とはもちろんそれを指したるものと考えられるのだが、僕はそれがよいか、どうか、ということより前に、「何のために川柳か」ということを追及しなければならなかったと考えている。伝統保守派以外の人たちは、すでに明治末期ごろからそのことを考えて、いろいろな試みを示し、大正期の革新川柳から昭和前期の新興川柳、そして現在(仮りに昭和後期と呼ぶ)の短詩派川柳へと糸をひいて、すでに形式と呼ぶべきものから離脱して、単に「短かい文章」という一点だけに存在理由を見出すことになっている。

僕一流の解釈によってそれを説明すれば「何のために」とは、「民族伝統の『短かい言葉で想念を表現したいという欲求』に添えて」である。したがって作句の目標は「どうすればいちはんその想念を適切に表現できるか」ということである。だからそこには一定の形式などの必要はない。いな一定の形式はむしろかえってさまざまにならない。表現しようとする内容と言葉(あるいはポキッブライイ)によって一作ごとに一つの形式が用いられるということになるから、結果的には形式はないというにひとしい。この僕の観点からすれば「現在の形式」すなわち五七五調十七音は、よいもわるいもなく、単なる一つの方法としてのみ存在理由をもつということになる。

以上の概説でおわかりのはずだと思うように、問題に対する僕の回答は「もし川柳を一つの文芸、すなわち作者の『生きていくアカシ』を示すものとしてやろうとするならば『現在の形式』を墨守することはナシセンスである」ということである。それだけではない。現在の伝統派作品が、おしなべてタイクツなマンネリズムの泥沼におちこんでいるものとは、なんでもかんでも五七五十七音のワクにはめこんでしまおうとする無反省な形式尊重主義のトリコになっているところにある。僕は言いたい。川上三太郎氏はかつて初心者指導の言葉として、「どんなことを言ってもかまわないが『行儀』だけはキチンとしなくてはならぬ」と言った。その「行儀」が五七五十七音だけに限定したものでないことは、その主宰する「川柳研究」の会員作品を見れば想定できる。僕の解釈では、この「行儀」とは表現の格調をととのえることであり、それこそは精神的に散文である川柳を一つの短詩文芸として読むにたえるものにしたる表現上の方法論でなければならぬ。したがって「現在の形式」を揚棄して、文芸としての川柳をめざすためには、実に容易ならぬ表現の苦心が必然的に要求されるわけである。この意味において、慰蔵あるいはレクレーションとしての安易な作句をいたしむためには「現在の形式」でよいとい

うことにもなる。極言すれば「十七音の綴り方」で、そのワクにはめこみさえすれば一応カッコウがつくのだから、こんな便利な形式はない。そもそも日本語による詩の原始的形体たる五七五調十七音は、音律的に朗誦しやすく、一種こころよいひびきをそなえている。それが民族の伝統としての「短かい言葉による想念の表現」という欲求に応えるためには一応便利であった。その便利さが、現在にいたるまで多数の伝統派川柳家に魅力となつて、無反省に慣用されているのである。ところが、その形式のために逆に内容が限定されてそのワクにあてはまらないような想念は川柳に表現しないという本末てんとうの結果を招来した。それが前述伝統派川柳の現在のマンネリ泥沼化におちいってしまった一つの重要な原因である。だからそれを救うためには、先ずその形式からの解放ということが要求される。

ここで考えられることは、みぎの僕的主張に対する反論である。いわく「今日の伝統派川柳のマンネリ泥沼化は形式のためではない。作家の努力の不足がそうさせたにすぎないのだから、現在の形式を尊重しつつ、内容表現ともにマンネリを打破した感動的な作品が苦心努力によって出来ないわけはない。今日の段階において、この形式による内容と表現とはまだトコトンまで追及しつくされていとは思われず、まだまだ開拓発見すべき余地がのこされているにちがいない」と。これはたしかに、そう言われればそうかもしれない。そうでないと、言っても反証をあげるのに困難な問題である。だが実作者としての僕の感想をそつちよくに述べるならば、非凡神のごとき天才ならいざしらず、僕たち凡才の立場として、現実そのようなものはほとんど不可能に近く、それについての努力はむしろ徒勞にひとしい。ドン・キホーテではないが、それを追求するのだと本人は思っているも客観的にはムダなアガキにすぎない。そんなことよりもこの形式から解放されて作句する場合に感ずる新しい勇氣と希望が泉のように湧きだしてくることの魅力が、どれだけ大きいかわからないのである。難きをさけて易きに就くというのではない。文芸理論的にも根拠をもたない単純なる伝承にすぎない五七五十七音の形式自体が、すでに現代感覚からズレているのだから、それによる表現に清新な感動を期待することは常識ではできない。いわんやこの形式にあてはめるために「女事務」だの「市場籠」だの「プラット」だのといたつた川柳家だけにしか通用しない低劣むざんなポキッブライイを製造するにいたつてはサタのかぎりである。

定形の意味する

もの

山村 祐

現在の形式で川柳はよいか、どうかについて書けと言われる。現在の形式とは、五七五の、口語の定形を指しての問いと、私は解した。

構成について

同じ五七五、十七音でも、文語定形と口語定形とは、単に文語口語の用語の違いだけでなく、句の構成そのものが異なる。

文語定形は切字の発達によって、句が立体的深まりをみせた。口語定形にも、切字の効果は認められるが、その性格は同じではない。俳句の切字は一句を両断し、その異子二つの觀念の衝突によって、次元の違う新しい詩の世界の創造を意識している。

口語定形句は文語定形句に比較すると、句の構成が平面的で、説明的要素が多い。しかしそれが佳句となると、叙事詩的効果をあげていることに気がつく。

指のない尼を笑へば笑うのみ

(楢 初篇)

この句は12と5に切れている(ここで問題にしているのは音数の切れ目ではなく、叙述の切れ目である)指のない尼を笑えば、その尼はどのような反応を示すだろうか、悲しむか、怒るか、その常識的な予期に反して、尼はただしすかに笑うのみであった。ということに、あ、なるほど、という読者の満足感とともに、その尼の過してきた過去が浮んでくるようで、ひとりの女人の姿が読者の心に切なくこたえてくるのである。句の構成は、切字の場合と違って平面的であるが、発せられた間に對し、思わぬところでみごとな解決をつけてしまうための、意識された切れ目が用意されている。この辺の演出がうまければうまいほど、読者は感心し、納得する。従つてうがちとか軽みとかいわれるものも、句の構成と切離して考へることは勿論出来ないし、川柳の切れ目と俳句の切字とは、ねらつて

いる効果からして違つていふと言えよう。

リズムについて

川柳も俳句もその定形は五七五であるが、性格は異なる。五音の短調から七音の長調に展開し、更にもとの五音の短調に戻るリズムは同じでも、それが句に及ぼす作用は同じではない。切字によって両断された文語定形句は、觀念の衝突によって、新しいコスモス(宇宙)を形成しようとするが、そのコスモスの独立性と完了性とを、五七五のリズムの回帰性が巧みに支えていることを注意する必要がある(このことは別に詳しく論じたからここでは省く)

口語定形句の場合にも、五七五のリズムは、その回帰性によって句の完了性を強めている効果を否定できない。しかしそれよりも、特に古川柳に典型的な形でみられる構成 (1)問題の提出 (2)展開 (3)解決、という三段論法的構成を、五七五の三段のリズムが強調し明確化していることの方に重要な意味を私は見出ししている。

このように同じ五七五の定形でも、文語定形と口語定形とは、句の構成、リズムと共に、異なる性格と効果のあることがもっと理論的に究明される必要がある。

結論を急ごう(この問題を四枚で論ずることは一本の綱で天に昇るように難しい)文語定形は口語定形に比較して、形成としての完成度は高い。しかし文語によって今日の詩の表現ができるとは私には考えられない。

口語定形には文語定形とはまた違う形式の固定化が著しい。現在に於ても前述の三段論法的構成に基本的につながっている。(すでに現代の口語定形句は古川柳から質

的転化を果しているならば具体的な御教示を乞う)現代の思考は、三段論法的経過を辿ることはむしろ少いかもしれない。私たちは結論から遡つて考へたり、途中から展開したり、ジグザグであったり、アンパランスであったり、とても一定の思考のコースに頼ることはできない。それゆえ新しい構成とリズムを支えられた新しい定形が生れれば別だが、私は今までの定形によって句をつくる気にはなれないのである。

川柳の形式について

光武弦太朗

「私は重ねて言う。先駆する人は孤独である。その孤独から力が生れ、孤独は常に何物かを創造する。」

(田中五郎八十一歳田森の家論 11・13・4・10記)

「新らしき声の最早響かずなつた時、人は其の中から法則なるものを選び出すと或人が云つた。階級と云い習慣という一切の社会的法則の形成せられた時は、即ち其社会に最早新しい声の死んだ時、人が徒らに過去に心を残して新らしい未来を忘るる時、保守と執着と老人とが夜の梟の如く跋扈して、一切の生命が其の新らしい希望と活動を抑制せられるのである。」

(石川啄木 北海の三番 11頁・5・6)

川柳の形式が現在のままでよいかどうかという貴社の問いに對して、私は右の二つの言葉を柳界に送りたい。

すべて形式が云々せられる時は原初の澆刺たる精神が死に瀕した時である。

茶道しかり、禅しかり、俳句しかり、川柳また然りである。

連歌に端を發した俳諧は芭蕉によって完成せられ俳諧の平均より独立した前附は柄井八右衛門及びその門弟吳陵軒可有によって、柳多留廿三篇として完成した。

以後四世・五世川柳によって柳風狂句として墮落していったことは諸賢御存知の通りである。

しかるに明治三十六年、三国干渉によって国民全部が無念の涙をのみ北満の空を睨んでいた時、剣花坊はこの川柳という寸鉄詩をひき上げて世に躍り出た。

それは愛國の至情に發し民衆啓蒙を旨とした一大社会運動であった。

もし劍師に借すに時運を以てすれば一國の大政治家となつたかも知れない。さすれば、クレオパトラの鼻以上の歴史上の変化がこのニッポンにも起つていたかも知れない。

「歌は悲しき玩具である」と云つた啄木は短歌の形式をおのが思うままに変えていった。それはまず短歌の口語化であり抒情と抒情の渾然たる融合でありさらには口語自然の音節を生かさんとする三行のわかち書きである。

赤紙の表紙手擦れし

国禁の

書(ふみ)を行李の底にさがす日

何となく

自分を嘘のかたまりの如く思い
目をばつぶれる

路郎師の「旅人」の三行乃至二行のわか
ち書きも、この啄木の短歌の形式をふま
えている。更にはその憂愁の诗情すらも。

また、叟乃夫人の「福寿草」にも、同じ
傾向が見られる。

初日キラキラ

網は殺生忘れてる

夕立は小気味よし

君が叱咤も

しかし路郎師にしても叟乃夫人にして
も、十七字という基本形式だけは守って
られるかに見える。それは「福寿草」の巻
頭句

十七字我等の国語なるぞかし

叟乃

を見ても察しられる。

この十七字という川柳の基本が絶対不可
欠の要素か否か私にはわからない。

ただ俳句の歴史の上で碧梧桐の新傾向自
由律が亡び井泉水の口語自由律俳句もいつ
となく影がうすれたことは事実である。

ただ尾崎放哉の

咳をしてもひとり

以下の異彩ある境界の遺句を除いては。

さて川柳の形式が現在のままでよいか否
かこれは俄かには答えられないテーマであ
る。

しかし五呂八と啄木の言葉を私たちが深
くかみしめるならば答はおのずから出て
来る筈である。

(昭和37・4・25巻岐阜朝ノ浦にて)

慎重な考慮と 行動を

早川清生

短詩型のどのジャンルにも、自由律を
唱える人たちがあり、伝統的な立場からは
まだ私生児扱いをされているが、私たちが
その作品を読むとき、一種のポエジーを感
ずることは否定できない。私は自由律の歴
史とその意見をほとんど知らないけれど
も、自由律の主張は多分多種多様な社会事
象や複雑きわまりない人間心理を千篇一律
に十七音字で処理する不合理を衝き、五七
五形式が起源的に文語発想に適し、口語短
詩型の川柳は個々の作品の内容にもっとも
ふさわしい形式を追求すべきであると説く
であろう。これに対して定形派は五音七音
は日本語の基本で、十七音字こそ川柳の約
束ごとであり、その形式とリズムは貴重な
民族の伝承であって、自由律と称するもの
は川柳と異った短詩として存在するものだ
と応えるのではなからうか。

韻文とは音数律と押韻とによって詩に音
楽性をもたせようとするもので、中国や欧
米の定型詩は韻律に恵まれたそれぞれの国
語を基礎として采えた。日本語は構造上押
韻がむづかしく、日本の詩は音数律の中で

美しい発展をみせた。各種の古謡や短歌や
五七五の俳句川柳あるいは藤村・泣重など
の韻文詩がそれである。しかし内容にとつ
て韻律は常によい伴奏者であるとは限らな
い。内容と言葉のリズムが調和する場合も
あるが、本来これは別個の美的要素であつ
て、詩精神のリズムが言葉のリズムにすり
替えられあるいは抑圧されてはいけない。
時代は詩にメロディではなく、もっと高度
の知的な精神活動を求めている。現代詩は
音楽性を放棄して純粹に文学的なメカニズ
ムの創造に進んだ。わが国でも海外でも定
形詩は、新律格やマチネ・ポエチックな
ど郷愁的に復帰が唱えられつつも、次第に
その権威を失った。

私たちは川柳を決して遊戯だと考えてい
ない。その短い形式の中に深い文芸的価値
を生み出したいと願っている。だからこの
ような詩壇の趨勢は決して無視できない。
私たちは現在実に定型を踏襲している。稀
には七七調があり破調があるが、こういっ
た言葉自体定型から離れられないことを示
している。定型を守ることに、あるいは新し
いリズムを創ることはまったく各人の考え
によるわけだが、無批判に定型になすみ安
住してしまうのではなく、真剣な再検討が
必須な時期にきているのではないかと思
う。定型の立場を守るにしても、きびしい
試験を経ることが必要で、その後定型こそ
を正しいという結論に達したときにこそ、
定型内におけるさらに次元の高い発展が訪
れるであろう。

内容と形式は本来ひとつのものであり、
これを対立的に見ることは誤りであって、
自由律の発展過程も社会的歴史的文学的な

背景から考えなければならぬ。私は不勉
強で自由律の人たちがどんな作品を代表作
として世に問うているのか知らないが、手
近な資料の

流民ではない掌中にある硬いキ
ッパ
中沢久仁夫

湖畔の朝の父母の腐臭をたゝん
でゐる
石川 兼郎

無才無能の時計に毛が生えてる
根岸 川柳

などに是非は別としてその傾向の一端を知
ることが出来る。もちろん自由律とは川柳
の散文化ではなく、個性的なりズムの発見
である。しかし自由律の歴史はまだ浅く、
川柳としてたくさん問題が残されてい
る。

路郎師の作品には形式に関する深い考察
のあとがうかがわれるものがある。

遺骨が戻り

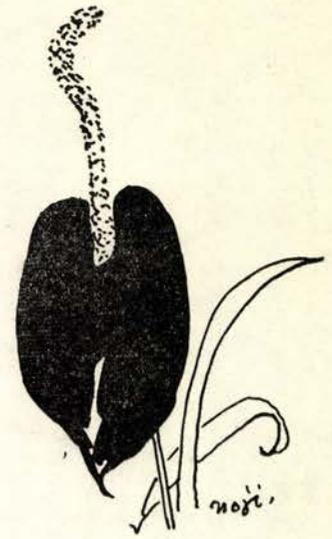
遺骨が戻り

本人が戻る

などの多行形式や

鏡 百合 たれも来ず

といった空白を設け間を考慮した表現は十
分考察する価値がある。以上自由律につ
いての記述が多くなったが、形式の再検討
が直ちに前衛川柳への転向を意味するもの
ではない。定型のよきは私たちが既によく
知っているところであり、柳俳自由律の伸
び悩みも理由のあることに違いない。しか
し詩壇の動向に追従することはないが、川
柳が現代の鑑賞に堪え、次代の文芸として
生き残るためには、犠牲に流れることな
く、形式(即ち内容)についてこの際もう
一度慎重に考えてみなければならぬと思
う。



ニワトリを 食いながら

東野 大八

「とうちゃん、ニワトリが
一つオカしいのよ」

と娘がいう。蔵の横のチャチ
な鶏小屋をのぞいてみると、
三羽のうちの一羽がべたんと

へたり込んで、いかにも苦し
そうにくちばしを半開きにし
てあえいでいる。眼玉だけが
ハッキリしていて、パチリ、
パチリとまばたきする。

「なんとかしてくれません
か」とまるで訴えてもいそ
なカオである。

トウガラシものませたし、
いろいろ介抱してやったそ
うだが、モウアカンと、家内も
見限っている。

「息のあるうちにトリ屋に
売るか」

と聞いてみたが、バラシ賃が
七十円で片身分けほどの肉を
もらうだけだ、ときいて、そ
れは不経済と勇をふるって介
しゃくする決心をつけた。

うちのニワトリはロククと
いう黒い鶏である。肉鶏用の
もので金持ちのマダムのように
にぼつてりとよく肥え卵も肌
色の重たい奴をゴロゴロ産
む。隣り近所はみんな白いレ
グホンばかりなので、うちの
ニワトリは特別製なんだ、と
いう思い込みが強い。したが
ってそのニワトリが二分の一
に減るといふことは痛い、が
病気には勝てない。

「許しておくれ、無情な奴
とららむでないぞ」

と因果をふくめてどうやらカ
タをつけた。もとより後味は

至極悪い。首のない胴体がカ
キの木の下枝からポタリ、ポ
タリと赤いのをたらし、下
にあるネギの白根にふりかか

のをみているといかにも惨
忍、という言葉や文字が頭に
くる。転った首が、眼を半眼
にひらいて僕を眺めているの
に出あったときには、さすが
の僕も寒気がした。

とにかく家内と共同で幾皿
かの肉塊として食卓に並べた
ときには、まる半日を費して
いた。

「さあ、チキンライスでも
スープでも、ウマ煮でも茶わ
んむしでもモリモリ作ってや

るぞ」

とあぶらだらけの手をふりか
ざしながら居合せたこどもた
ちに僕はいったことだが、三
人とも至極不きげんで、一言
もいわずにそろってどこかへ
行ってしまった。

ピヨピヨと可愛く走り回る
ヒナドリのころから手塩にか
けてきた鶏が無惨にもバラバ
ラにされていまや腹中に入る
のだ。こどもたちにはすれば、
可哀想やら痛ましいやら、そ
の追悼の念いと深きに応じ
て、その哀切は僕への憎悪と

なる。頭の皮をはいだインデ
アンでも眼の前にみるような
具合だ。

「ゼツタイ、あたいは食べ

ん」とまず上の娘が食卓上で
宣言、中も下の娘もみんな同
様である。(女の子はこれだ
から困る)と心中思ったこと
だが、とにかく彼女らのレジ
スタンスにはこちらに返えず
言葉もなかった。かくて僕一
人がうまそうに煮える鍋中を
つついた。家内も娘三人に同
調して

「どうも胸につかえて……」
とかなんとかいって、亭主と
こどもの中に入って義理立て
する。

そうなると勝手にしろ、と
いった顔で、強いてあてつけ
の舌づつみを打つ僕だが、う
まくないこと話のほかであ
る。

「ニワトリにはウラまれる
し、お前たちにはキラわれる
し、トウちゃんも悲しいヨ」
とつい本音をはいたら、末の
子が

「今晚、トウちゃんのおなか
の上で死んだニワトリがタッ
プダンスを踊るワヨ」
と悪たれ口をたたいた。その

眼つきが、首だけになったホトケさまの半眼の眼にそっくりなのでトタンに、煮える鶏肉がバツタリ食欲を止めてしまった。

「軍隊ではな、至るところでニワトリを食った。食わなきや戦争して歩く兵隊のこちらの身体がモタンからな」と僕は現実と一足とびに別の話をこうきり出した。

「そうだな、一日に二、三羽ずつ食ったな、洛陽というところはニワトリとブタのヤケに多いところだった」

そうだ前線はニワトリでいっぱいだった。と僕は心にくり返した。第一大隊第一中隊第一小隊の第二分隊員だった僕は、何かがあるつまっ先にコキ使われたものだ。

ネコの子一匹ない部落へ斥候に出されたり、落城直後の火の手の上っている県城へも入りこんだりした。これをテックツというんだが、もとより生命の保証は皆無、鉄砲玉のかわりの兵隊なんだからい

つゲリラや敗戦兵の一発でトンコロになりやすい。事実よくわれわれのような分隊は死傷者が絶えなかったものだ。そのかわり役得も真っ先だった。事実これがなければマキを背負って火にとび込むようなものだ。無人の部落に生きものといえばニワトリかブタだ。(牛はいない、農民が荷物をのせて連れ去るためだ)敵無き無人の一面だとわかるとたちまちわれわれは鶏を追いつぶるかまえた。

から携帯食糧なんて一切ない。行き当りバツタリで現地徴発である。そのエサの筆頭はニワトリが王様だった。そんなわけなので、ニワトリ料理のうまさ、スピードいのはわが分隊が抜群で、湯さえわいてれば一羽に二分とかからない。その方法は、まずカマ二つに湯をわかす。ニワトリの頭は踏んづけて引き抜くとワケはない。首のないうちに血が抜けてしまう。そのぐったりとなったのを片っ

ばしから熱い湯にほうりこみ、その中で毛をしごく。つるりときれいにとれてしまふ。そのストリップになったのを、もう一つのカマへほうりこんで丸ゆでにするのである。これが分業でツボに入っているのでもことに神速、食べるのは歩きながらなので、行軍の疲労等もジカには来ない。

「ニワトリは懐ろ手をして走るようーって川柳があるがね、みろ、あのレグホンなんかコンパクトで頭に紅をぬって走ってやがる」
てなことをいってわれわれは戦場の束の間を鶏狩りできを忘れるのが常だった。
「だから時にはニワトリを食わねばむかしの生命の恩人を忘れるっていうわけね」と上の娘がはじめて人並に口をきいてくれた。フン、フンといながら、僕はフト考えた。もし中国から対日賠償の請求書をつきつけられたとき、果していくらの鶏肉料を支払わねばならんのか、それを考えて親方日の丸でもいささか気の毒になってきた。

金 泥 集

麻 生 菫 乃 選

課題 「自炊」

母が来てやもめの自炊あわれがかり	阿 茶	空缶ゴロゴロだらしない自炊	同	自炊する娘へ故郷の干いわし	同
サラリー前自炊親戚食べまわり	同	インスタント並べて妻の里帰えり	同	差入れと称し自炊へおかずくる	俊 江
留守番の自炊バターを空にする	同	共稼ぎ自炊の時と大差なく	一 栄	新婚の女自炊の腕を見せ	同
自炊今日好き嫌い云うた日思い	同	三日分一度に飯を炊く自炊	同	自炊した経験夫のやかましい	周 甫
自炊ぐせ出て花嫁にさらわれる	小 石	自炊今朝飯抜きで出勤し	同	友達自炊へちよこ提げて行く	同
妻の留守自炊の腕が役に立ち	同	ステレオに合わせ自炊が出来上がり	春 栄	コロッケの売り場で自炊顔なじみ	友 子
共稼ぎまだ自炊からぬげきれず	同	寝巻着たままで自炊の朝が出来	同	出勤に厭で牛乳飲む自炊	同
自炊忙がし犬が待ち猫が待つ	同	いい加減にもらえと自炊のせかれる	同	五重の塔くって自炊の部屋留守	好 女
ポーナス四五日自炊中止する	同	自炊する気で進学の夢捨てず	都	自炊するまで漕ぎつけた我が主張	同
インスタントずらり自炊の棚の色	同	隣りから小皿へおかず来る自炊	同	自炊また来しからずや三日だけ	美 代
式挙げて自炊の日とグッドバイ	清 子	ラーメンで今日も自炊の昼がすみ	同	自炊する子に若鳥むしる手もたし	同
		自炊するチョコガ隣の娘が見兼ね	勝 子	自炊してアルバイトして卒業し	徳 子
		佃煮で済ます自炊の夜はうどん	同		

次回題「交際」 切六月末日



義談窓

再び「短詩文学文庫」のこと

麻生路郎

に図書館まで運んでもらったものの中から重複するものは一応持ち帰りを願った。近く館長のくるまが出来るので、それで何度かに運ぶつもりである。

★東京からは山路閑古氏が自分の著書の「川柳歳時記」や「末摘花並べ百員全釈」なら贈ってもいいかと申込んで下さったが、二書とも小生の手許にあるから、小生から文庫に収める由を申上げて、ご好意を謝し、今後のご協力ご支援方を願っておいた。山路閑古氏はペンネームで、本名は萩原時夫と云って、大学の先生である。

★東京の漫画家で雑誌記者である種咲二氏からは「雑誌拝受、文庫の件、ロクな本も持たせませんので、先生より、新本、古本の注意を私に出していただければいくらか御寄附したいと存じます。」云々とあった。

これもまことに要領のよい申出であるので、いずれごムリを願うつもりだ。何れにしても、出来るだけ多くの方々のご協力によって多彩な文庫を創りあげたい所存だから、どうかよろしく。

★大阪の漫画界で活躍され、川柳不朽洞会にも籍をおいていられたので、本誌の読書にお馴染みの方が多かろうと思う。

★アメリカのイリノイス洲のメルローズパークに居られる野尻南海氏からも文庫に関して次のような書信をいただいたことを感謝して

★本誌「三月号」に「眠っている本を」と題して、「短詩文学文庫」創設のことを発表したところ、まことに有意義な企画であるから協力を惜しむものでないとお手紙を多数の方々からいただいたので感激している。

★橋本緑雨氏は同氏が昭和二十三年拾月に編纂した明治・大正・昭和柳書目録を持参して、これ等の蔵書のすべてを贈呈してもよいと云うことであった。そこで、私は同氏を東住吉区のお宅へ訪ねて、蔵書を見せてもらった。その冊数は四百部からある。何十年かかって蒐集された柳書である。その中には蒐集のために、いろいろと苦心された談しもあった。大変な重量なので、猫の子をもらって来るような訳にはいかない。その中には私が既に文庫に収めた柳書もあるの、とにかく持てるだけでもらして引き下がり、同氏の好意による寄贈本として整理し、大阪市中心図書館へ運んで「短詩文学文庫」へ収めた。氏の所蔵する柳書と、私の所蔵するものには多数の重複するものがあるので、二回目

續

川柳書架

(20)

句集
すて石

(小泉紫峰著)

★巻頭に、川上三太郎・村田周魚・楳元紋太・佐藤狂六・五十嵐さか江の諸氏の序がある。

★目次に「底のない樽」「影法師」「たまさかの酔」「吾子還地」「軍馬御用」「娘の理想」「齡不惑」「春の種子」「土」等。大正十三年―昭和三十七年までの作。

★昭和三十七年二月十日発行。B 6版一五六頁。非売品。発行人、小泉紫峰。発行所、八戸市大字柏崎新町、はちのへ川柳社。

★著者は、はちのへ川柳社主幹

塔

(川柳作品五人集・共著)

★巻頭に著者代表福永泰典氏の序がある。五人集とは下記の五人の作品集である。北川純一郎・田中

秀泉・西沢青二・伊藤入仙・福永泰典。各句集の最初に、略歴がかげられてある。

★あとがきの一部を抜くと。

口句集発行の話題が上がってから一年、水銀の上りきったところに、その構想を、かすかな虫の声をきくころには具体的な調整にはいつて、頭の中でこのきれいな句集の姿が固まってくる。それからが大変な仕事で、たとえ一人五五ページの受けもちにしろ、作品抽出には三〇〇ページ五〇〇ページと同じ労力がともなう。きちようめんな人は作品が整理してあるが、ほとんどがまず散逸した作品を集めることからはじめたらしい。云々(以下略)

★昭和三十七年四月一日発行。B 6版、二八六頁。定価三百九十円
★発行所、京都市中京区夷川通鳥丸西入、平安川柳社。
★共著者は平安川柳社の人々。

壺
句集

(きやり七人集・共著)

★本書の巻頭には川柳きやり吟社主幹村田周魚氏の序がある。

★きやり社人で、下記七人の共著である。石川真砂・磯部行成・磯部鈴波・鹿島一甫・神田仙之助・野村圭佑・山本実道郎。何れも句

いる。

——(前略) 先生が「短詩文学文庫」のために、短詩文学書をお集めになつてゐることを雑誌で拝見。一昨年北米全柳人が一丸となつて発刊しました「全米川柳句集」とシカゴ吟社十五周年記念を一部宛お送りします。句の上手下手は第二の問題として、アメリカでその半生をあらゆる困難と闘つて来た人達の憩の場の川柳作品を意義あるお企ての片隅にお収め願えれば幸甚に存じます。(以下略) 野尻南海氏は海外にいられる熱心な川柳人である。ご好意とご協力を感謝している。何れ着本次第、文庫に収めて日本の皆さんに読んでもらうことにしたいと思う。なお海外にいられる便宜上、海外の詩書(何語でもよろしい)や、土人などの唄などの印刷されたものを発見された場合、ご寄贈願えればと思つている。今のところ内地の短詩文学書の蒐集に主力をそいでいるが、何れは世界的に詩や唄なども集めたいと考えているので、その点お含み置きたい。こんなことは一朝一夕に出来ることではないので、将来のことまで多少漏らしておく次第である。

た。六十余年を短詩界に生き抜いて来た私として、その晩年を日本短詩界のために、余命を燃え尽くしたいと考えて、短詩文学文庫の創設を思い立ったのである。これ又第二誇大妄想狂として歯才にもかけない人もいるらしいが、右顧左盼して、巧みに世渡りをすることは私の柄でないで、そんな連中はこちらで歯牙にかけない。ある程度出来上つたら、そんな連中こそ真つ先に文庫を利用して少しは妄を啓らくすがにして欲しいと思つている。

★私が、三月号で「眠っている本を」の一文を公表したところ、新津市の柳誌「柳都」をはじめ、あちこちの柳誌で有意な企画として賛意を表してくれたことは感謝の外はない。

この文庫は大阪市民のものでなく、オール日本人たちの洗脳に役立たせるためのものであることは、大原孫三郎氏の削つた會敷美術館が一會敷市民のためのものでないのと同様である。

★私に直接連絡はないが、ひそかにこの企画の援護的な役割を果たしてくれている人のあることを知つて私は感謝している。

それは某社の川柳大会の席で、その社の主幹らしい人へ、この文庫のことを談している人を見かけたが、その主幹は気の悪い返事しかしなかつた、その場の情景を見ていた人から知らしてくれて、しかし、私はこの話を聞いて

も、その主幹に対して、少しも悪い感じを持つてはいない。某氏が文庫の談をどの程度にしてくれたものが判らないからである。某氏の好意は感謝するが、その主幹らしい人へあまりに唐突に、その話が持ち出されたとすれば気の悪い返事も当然だったかも知れない。その主幹にして見れば、その日の大会のことで頭の中の全部が占領されていて、文庫どころではなかつたのであろう。

★だから私は、「眠っている本を」の一文の中にも、そのことはいささか触れて、熱愛する蔵書者へいただきたいとはコレッぱかしも述べていないのである。読み手もなくなつた本で、しかも、短詩界にとつて有用な本をいだけた欲しいことを繰りかえしておいた筈である。柳人には川柳の参考資料として購つたが、もう保管する必要のない場合の俳書・歌書・詩書などを文庫に収めていただけば、そして必要のある場合は自分も文庫の利用者の一人になつてもらえば自他ともに好都合ではないかと思つている。

この文庫に関して、いろいろと誤解されてゐる方には、徐々に誤解をとりもつてより仕方がない。それが出来なければ私の熱意が足りないものと思ひ、どこまでも自分をむちうつことだ。要は文庫の完成にある。

集の最初に略伝が掲げられてある。

★「あとがき」を抜くと、句集をこしらえよう……と云い出したのは、昭和三十三年の春早々のこと、資金の方もそこからはじまつて、ようやく一冊の本にまとめることが出来た。ここに竝んだ七人の顔は、思いもつかぬところに、それぞれの故郷がある。顔も知らず、名も知らずに、みんなが、遠うところで違ふきつかけから、同じ川柳の道を歩んで来た。年経て互いに顔を見合せるきやり吟社の社人となつて、嘘のない付合と、明るい家庭の中から川柳を通じて、十年—二十年—三十年、楽しんで、集りは、よっぽど深い緑の連りだろう。云々。(以下略)

★昭和三十七年二月十一日発行。B6版、三六四頁。頒布所、東京都台東区入谷町三三一、磯部森作

親と子への お手本

不二田一三夫

うらやましくないか俺には母があり 生々庵
ボクも母を自慢にしたこともあったが、二十年ほど前に死んだ。だが死んだ年月日を全然おぼえていない不幸者である。二十年ほど

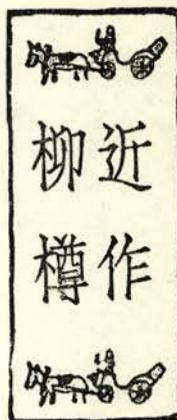
というのは三番目の娘が生まれてまもなく死んだからだ。娘が二十一、二だから二十年ほど前とだけより覚えていないのだ。

いま親父が布施のある病院へはいつているが、入院一年になるのにまだ見舞いにも行っていない。中島博士をお手本にと反省しながら親不孝をつづけている。

ひよつこりと帰つて来そう
な夜の膳 多久志
不朽会副理事長若木多久志氏の子を愛する親ごころは、句集「親ごころ子心」でもわかるように、まれにみる子ほんのうの方でこれまたお手本に思ふのだが、これとてなかなかおよびもつかないことである。

さんきゅう 紙に多久志氏が連載されている「愛児の生いたち記録」愛児の生日記を丹念に書いたものである。例えば十四日目には出生より百匁増加したとか。これは得難い愛情の記録である。

ボクなど、子が二人死んだが、その二人の子どもの死んだ年月日も、母知同様忘れてゐる。多久志氏のような親ごもあればボクのような親もいる。——少年時代に苦労をすすきたので、その日その日を忘れるクセが今日なおつづいてゐるのかも知れない。



麻生路郎選
北川春巢選

窓枠にほほ杖をつく恋ごころ 大阪市 堀 風仙洞
 バスガイドにしとくにおも顔と声 同
 酔えば唄独酌のあじ君知るや 同
 息切れのするほど恋をしてみたし 同
 棧橋で会う汽船から打ったウナ 同
 詩吟書道小唄も習う芸の欲 同
 不具の娘がほがらかすぎて母悲し 兵庫県 遠山 可住
 何をすする人か巡査と笑いあい 同
 上等兵の眼に自衛隊なつとらず 同
 手をとって逃げた大阪で別れ 同
 相談の結局カレライスにし 同
 思いきり頬なぐられて惚れ直し 石川県 同村 虹要

勉強へ停電バンザイ叫びたし 同
 総入歯してもよろめきものがす 合格のうれしき座席までゆずり 同
 失恋のいたでへ猫も近寄らず ラッシュニアワー勿体なくも回送車 青森県 木村 涼人 同
 ポケットを掃除し暇な事件記者 同
 斗酒辞せじ平均寿命当てにせず ザアます婦人に初産おどかさ 同
 チャンボンに飲んで浮き社を休み 羽根野市 島田 雄峯 同
 鐘の音さすがは奈良と思う宿 同
 食欲に暮して極楽など話し 同
 お隣の不幸へ矢印貼る役目 同
 人並みにとぼけて暮すことにする 鳥取県 鈴木村 諷子 同
 お追従笑いの君も事大主義 同
 歌謡曲唄って七十まだ若し 同
 住み慣れて嫁この村の顔になり 同
 伴は愚痴る話題が見つからず 秋田市 宮川 珠笑 同
 読み捨てるピラでも呉れ 腹が立ち 同

現代柳人録

(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(138) 磯部 行成

(一) 磯部 いそべ (二) 行成 ゆきなり
 (四) 東京都武蔵野市境三丁目三一二番地 (五) 明治43年3月7日 (六) 三重県鈴鹿市神戸新町 (七) 会社員 (八) (九) 親しさに打明けすぎた悔のあり (一〇) 版画の研究 (一一) 有 (一二) 昭和五年一月

(139) 小林 文月

(一) 小林 こばやし (二) 文月 ぶんづき
 (四) 尼崎市難波南通三丁目六八番地 (五) 明治29年7月9日 (六) 兵庫県小野市三和一九〇ノ一 (七) 会社重役・技師 (八) (九) 卒業は自己の努力とのみ思 (一〇) 囲碁・生花 (一一) 有 (一二) 大正十三年春

(140) 山田 季賛

(一) 山田 やまだ (二) 季賛 きざん
 (四) 広島県安佐郡都町大毛寺住宅四号 (五) 大正15年5月



いんぎんに待たず受話器のオレ ^レ	同	まな板のリズムへ機嫌のつている	同
銭湯で娘やる気はおまへんか	同	大げさに笑い正論もてあます	同
仰山な見送り東京の予備校入り	同	肩だかすように窓から灯をながめ	同
肋骨を打つてもゴルフやめられず	同	あんな娘にほれてたで喰う虫に ^き	同
あじさいは雨にぬれてる葉玉か	同	芒原坪万にするブルドオザア	同
花の下野立の横でパーベキュー	同	リングにも表があつた籠の位置	同
愚妻にも取柄流感など平気	同	リース手袋糠味噂知らぬ手が ^り	同
若社長車いじりにもう飽きて	同	妻の留守ダブルベッドをのうの ^う	同
火を踏んだようにツイストさ ^ま	同	二才の孫におちよくられる楽し ^ま	同
門付けのギターへ耳を貸すも春	同	手に負えぬようになれ ^ま 孫を抱き	同
二階借りしてカーも持ち株も持ち	同	核実験雀只今恋愛中	同
美智子妃のための交通マヒに遇い	同	碓害の村をジェット機やけに飛ぶ	同
吉野今ほっと一息花の雨	同	永生きの手相がころりダンブカー	同
給料日子等のおだてにのつてやり	同	夕桜しきりにものを捨てたがり	同
気にせずに居れない事をささ ^や	同	春闘の鉢巻のまま目刺焼く	同
たまに持つお札だしかと透してみ	同	流感はずり博士は匂に帰り	同
東京駅降りて夜行の欠伸する	同	高校生のお年玉ゼロが三つ要り	同
損したと云わず勉強になりました	同	知恵熱と云つてる祖母にまかさ ^り	同
津 市	同	神 戸 市	同
須藤 俊江	同	大久保 和三郎	同
板倉天悟空	同	小川静観堂	同
山内 静水	同	小田 無限	同
里田一十	同		同
波多野 美由起	同		同

味の七-コ

モダン 川柳

心齋橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL(271)6684

街集会には陸上御利用下さい

15日(六) 滋賀県甲賀郡水口町今郷六一七(七七) 国鉄職員(八) | (九) 金詰りポケットにある煙草の粉(二〇) 旅行・登山・俳句 (一一) 有(一二) 昭和二十年十月頃俳句から川柳へ転向

(141) 山本 実道郎

(一) 山本 新次郎 (二) 実道郎 (三) 心二郎・俳句 (四) 東京都練馬区桜台二ノ三(一五) 明治39年12月11日(六) 東京都港区芝白金町(七) 会社員(八) 東京(九九一) 九二八七(九) 花吹雪僕の命は僕のもの(一〇) 俳句(一一) 有(一二) 昭和五年七月

(142) 杉 谷 湖 山

(一) 杉谷 徳十郎 (二) 湖山 (三) 孤山 (四) 鳥取市職人町



知恵ついで母の外出不ぐさとり	同		冬服のままで僻地の春が過ぎ	仙台市	平野	光道
三面を披けば今日も横倒し	兵庫県	河原みのる	バストラック疾走するだぞ	村貧し	同	
川の字のくらし打切るペーパー	同		吉野山四国の酒は空になり	松山市	河本南牛史	
中学生入学			お土産が鞆に隙間作らせず	同	同	
白線銀輪親の苦勞は続くなり	同		客の居る間カナリヤさええず	大阪市	藤富	淀月
フアツションショー 特売場でまた出会い	西宮市	白石 良圭	頼りない噂と別に金を貯め	同	同	
葬式へゆくにカメラをぶらさげて	同		手肴で飲む頂上はよい眺め	笠岡市	佐内	隆文
先手必勝女房のよく喋り	同		酒あれば殺風景もよい眺め	同	同	
割箸でもう他人めく実家帰り	神戸市	岩井 千甫	腰かけたとなりの口は動きずめ	河内長野市	森本	黒天子
がめつさも必要父の社会説	同		スト明けの電車は感謝の客を乗せ	同	同	
再会へ互いに詫びる筆不精	同		朝早く目ざめるくせも貧乏性	大阪市	西本	保夫
安産の出来ぬ骨盤へ又はらみ	岡山県	永宗 宗義	じみなのを又買って妻の貧乏性	同	同	
青い鳥探してあるいた花の下	同		小遣を使い果して安静し	貝塚市	護川	梢月
降りる迄待てぬ笑顔のむかえ傘	同		雨傘に花びらつけたままで干し	同	同	
胃が悪い話酔うほど忘れかけ	鈴鹿市	吉田 俊和	十字架轆かれたハル春雨の朝	八尾市	吉田	博一
ホームシツツ云う名目の金が切れ	同		己れが掛けたカネ借りる判を押し	同	同	
胃の底へ真っすぐ義理の酒が落ち	同		春爛漫 離婚話の友といる	市指市	久米	奈良子
折角のマットレスだが祖母嫌い	大阪市	三輪九文銭	糠袋つかい美容もリバイバル	同	同	
容子する事をママゴト早やおぼえ	同		家柄も育ちもよくて職がなし	高知県	山川	勝子

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇〇円
送料(二冊分)二〇〇円

(五) 明治29年1月22日(六) 鳥取市湖山町(七) 密接(八) 百姓の真似してトマト皆枯らし(一〇) 旅行・野球見物(一一) 有(一二) 昭和元年頃

(143) 富岡 淡舟

(一) 富岡頼雄(二) 淡舟(三) 三丁目五五の一(五) 明治44年7月18日(六) 兵庫県三原郡南淡町福良(七) 交通局職員(八) 貧乏でよいの愛してくれるから(一〇) 園芸(一一) 有(一二) 昭和十三年七月頃

(144) 高橋 操子

(一) 高橋操(二) 操子(三) 明治44年5月26日(六) 和歌山県那賀郡岩出町水栖(七) 呉服屋(八) 岸貝局(九) 家政婦の素足きれいな座りだこ(一〇) 洋裁・魚つり(一一) 無(一二) 昭和三年

(145) 内藤 きさ子

(一) 内藤 宣左子(二) きさ子



お花見をよそに喪章の要る外出	同	恋人のない者同士の恋愛論	大阪市	山崎佳津子
手枕が欄にきたのか起き上がり	笠岡市	墓場を楽園と信じとつぎ行き	同	同
団地から嫌な風吹く田草取り	同	パチンコへ残業手当捨てにゆき	豊中市	稲増 久雄
観光地鐘の音さえも売れて居り	松江市	靈魂の不滅を信じ星を見る	同	同
虎穴から裸にされて戻って来	同	名医には名医の苦勞子が継がず	松江市	内藤 喜夫
あすありと思ふ心で花に酔い	須崎市	人生觀説く先輩が左遷され	同	同
着物には触れず花見はよしました	同	気苦勞に腹のへらない日が続き	倉吉市	奥谷 弘明
就職決定明日より麻雀覚えます	大和郡山市	赤旗も振り日の丸も立てて生き	同	同
学校を追われる如く卒業す	同	刑務所の桜聖書の上に落ち	兵庫県	常岡 孝風
赤チンと縋帯換えに長う待ち	岡山県	せせらぎを雨かと旅の窓を開け	同	同
引越の手伝い庭木を貰って来	同	色あせし桜へ景気よいお酒	高知市	野村 利子
婚約のもう複数にして話し	鳥取市	貯金額増えて買いたいものもやめ	同	同
観光シーズン砂丘も動き出し	同	カロリーだピタだと給食費が上り	金沢市	河合卯生木
さあまずにはあられもない姿	金沢市	二三尾釣ると附近の竿が寄り	同	同
大ジョッキ真夏がキューキョク	同	下戸の妻客の手酌に気がつかず	玉島市	田辺 好女
病状が良くなり大きなホラを吹き	利根野市	知識欲失せて物欲だけ残り	竹原市	渡橋 素風
女房の良さがわかった療養所	同	里の母泊めて世帯を土産にし	芦屋市	三上 芙路
不器用を根気でカバーして来た手	西宮市	百点をとってつまらぬ母の留守	新居浜市	小林 孝生
内職もストをしたらとハッパかけ	同	淋しいな女奴抜けた妻が出来	大阪市	万代句念坊

スマートで
着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

(三) — (四) 大阪府岸和田市
上町三六(五) 大正10年5月7日
(六) 大阪市天王寺区(七) 主婦
(八) 岸貝局②八〇七九(九) 儲
ける昼寝長靴はいたまま(一〇)
舞踊(一一) 有(一二) 昭和十六
年

(146) 磯部 鈴 波

(一) 磯部稼作(二) 鈴波(三)
入谷村(四) 東京都台東区入谷町
二三一(五) 明治40年11月1日
(六) 山梨県中巨摩郡昭和村字飯
喰(七) クリーニング(八) (8



私ならこう云う後の知恵を付け 玉野市 小谷 仙山 新居浜市 安藤 桂仙

ブライドがどうのこうのと酒を 松江市 岡崎 祥月 布施市 古谷まさる

小金出来御用聞きより 市場籠 富田林市 浅川 八郎 鳥取市 近藤 紅石

ママボリスほんとの親のよと説き 松江市 岡崎 雪美 玉島市 井上 旭峯

おじいちゃん二男に行けば 神戸市 吉田 隆史 宮崎市 野口卯之助

気に喰わぬことに返事しない歳 神戸市 三宅 ろ亭 笠岡市 蔵本白梅子

テレビ料理眺めて今日も菜っ葉汁 七尾市 市橋あきら 鳥取県 水野 春子

格上げ二等ひしめき走る四等国 遠野市 鈴木 二文 出雲市 中川 晃男

会長を断り切れぬ顔で受け 七尾市 松高 秀峰 大田市 山田 蛙水

窓明けたままで独身寝てしまい 大取府 井上美恵子 愛媛県 村上 石峰

こわいのが三分ムードへ身を任せ 新潟野市 福井与太郎 愛媛県 岩井 紫貞

信用はゼロですねんと飲んで居り 神戸市 沢田 恵甫 姫路市 隠岐 不酔

死亡ゼロ一步手前でユーターン 美木市 高木繁太郎 大取市 長田 衣江

きびしさを語る農夫の手の固さ 愛媛県 川又 庸児 長男小学入学

浪人の覚悟が出来て 悪びれず 兵庫県 齋藤たけお 今治市 越智 一水

月賦着て見合写真 は男まえ 福岡市 本村珍ちく 大取府 米田 美夫

鯉のぼりおむつも共に 五月晴 大取市 井石 泰泉 神戸市 吉田大治郎

武骨さをむき出しにして故郷の母 福岡市 本村 喜代 笠岡市 高木 渋柿

子に卑屈感じさせない母の皺 宇部市 神田 豊年 岡山県 鳥取 周甫

お知らせ
バックナンバー入用の方は、往復ハガキでお問合わせ下さい。
川柳雑誌社

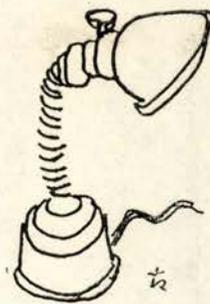
73「四四九一(九)日の丸を立ると酒がほしくなり(一〇)旅(一一)有(一二)大正十二年

(147) 弘津 柳 慶
ひろつよしお 柳慶(三) 慶一(四)山口県柳井市柳町専売公社社宅(五)大正4年5月5日(六)朝鮮釜山府(七)日本専売公社経理課長(八)七二一(九)ランドセル開けて見閉めて見替負って見(一〇)スポーツ・野球(一一)有(一二)昭和八年十一月

(148) 鹿島 一 甫
かしまきんいちろう いっぽ

(一)鹿島金一郎(二)一甫(三)目一番地・四谷市場内(五)明治35年11月30日(六)東京都港区芝罘平町(七)金物店主(八)四谷[351]〇三〇三(九)好きな句は雪山の素顔怒った母に似る(一〇)登山・写真(一一)有(一二)大正八、九年頃

生活の展開



出張指導あれこれ

川村好郎

故須崎豆秋氏は長く大阪の丸紅飯田株式会社へ川柳指導に出席されていた。ところがあの重い病気に犯され、入院されるに及んでもはや同会社へ行く事も出来なくなり、二年程前に私に代りに行ってほしいと御依頼があった。

そこで路郎先生にお伺いしたら、行くようにとお許しを得たので豆秋氏に其の理由を申上げた。すると一度退院して自宅で養生していたら氏は非常に喜ばれ、「私の一生の願いだから頼む。私は話が下手だからプリントを毎月刷って教えている」と教材を全部私に渡され、指導についての注意其他を親切に教えて下さって、これで安心したと心から喜んでいられた。

作れないし柳歴も浅く、その上氏の人格に比すべくもなく、ただ氏が病気が快くなられるまでの継手としてやらせて貰う決心で、おこがましくも毎月一回丸紅飯田株式会社へ出席したところが、豆秋氏再び病気が急変し遂に去年五月逝去された。

引継ぎのつもりが豆秋氏の逝かれたことから私の責任が重大になり、それからただ豆秋氏の「一生のお願い」と云われた一言を守り抜くことと、豆秋氏の長い間の御教導をけがすまいという一念で毎月出席した。

お蔭でお前は困る誰か外の人とも断わられず今日に至り、むしろこんな私を可愛がって頂いて、或は宝塚、箕面に、近江阪本へと吟行に連れてもらい、三月にはい

ち早く早春の吉野へ吟行に、とても私一人では行けないような接待を受けている。

私は何でも川柳を教えて知らぬよい所へ連れてもらうなどと思つて出席しているのではなく、只豆秋氏を敬慕し一生の願いをかつつながらもつづけてゆきたいだけだ。こうなつて来たのであった。

同社発行の社誌「まるべに」の百号記念には第一席入選した美幸さんのごときは多趣味のまだ二十才を越した娘さんだが、最近川柳に一番力を入れ同志の娘さんも誘い僅か二年たらずのうちに佳句を作るようになった。

百花爛漫名もない花も共に咲き
 なお信じはかなく生きるのも女
 これは最近の美幸さんの句です。

羽曳野句会、丸紅飯田の句会といい、私の小さい信念というか、道を求めるというか、今日の生活を生かし、育てることによって予想もせぬ成果があらわれ、これから先きどんなに生かされ、展開されてゆくか、こういう生き方があ

ることを教えられたことを感謝しています。

川柳だけでなく、すべての生活に深く掘りさげてゆくことよつて人生の展開が求められることと

思ふ。
 天位の句を作ろう、不朽洞杯を獲得しようとおせり、あて込みの句を作る職人になるよりも、自分の句にもっと深み、信念を打ち込んだ句を作ろうと育て上げてゆくことよつて自ら生命ある句を創ることが出来ることと信じます。

不朽洞会理事長中島生々庵博士の診察室に入ったことがある。

小児科の先生で診察される小さなベッドの真上に恩師大坪博士の写真をかかげていられる。即ち博士は恩師を仰ぎ恩師の指導をなお受けつつ診られているのである。

御発行の「さんきゅ

日本 中国の文化財をあつめた美の殿堂

大和文華館

法同絵磁 台同陶磁
 蓮はじめ 物語は陶磁など
 一語を 覧書織文化財をお
 屏風 覧図 彫金重要文化財を
 興 覧 彫金重要文化財を
 風 覧 彫金重要文化財を
 屏風 覧 彫金重要文化財を
 松浦 覧 彫金重要文化財を
 華経 覧 彫金重要文化財を
 雪 覧 彫金重要文化財を
 園 覧 彫金重要文化財を
 開館 毎日10時～4時
 (月曜休館)
 学園前駅下車すぐ

近畿日本鉄道

う」の創刊号に会長として、発刊挨拶されている中に、こどもは悠久な大自然の力の一部分として自らの力で伸び成熟してゆくので、この大自然の巨大な足どりの一歩々々をさまたげぬように、或はさまたげを与えようとする者を細心な注意で取り除いてやるよう努力するのが、医者役割として与えられたものであつてこの祈り、謙虚があつてこそ、育児の務めが果せるのであると述べておられる。

これ等の信念が今日、小児科の泰斗として数千の家族の方々に敬慕される大を築きあげられていると思ふ。

「生活の展開」立派な理事長を頂いたものである。(完)

評句

リレー



大阪府 神戸市 米子市 石川縣

川村好郎

仲 どんたく

小西雄々

野村味平

新しい大臣の名で許可が下り

柳志

好郎―前大臣時代に申請したものが未決の箱に埋れたままになって、新大臣になって許可が下ったのである。新大臣の抱負に込めて所屬当局が処理に渋滞させず、張切ってくれたのか。そこを「新しい大臣の名で」と詠まれている。或は申請者と新大臣と特別のコネがあるのか、或は新大臣腕の見せどころとして許可したのか。それ等をあっさり詠まれている。しかし一読して思わず膝を叩く程の句とは思わない。

どんたく―柳志さんには世相を軽く皮肉った句が多く私の好きな作家です。この句も軽いや味の無い句と思います。新しい大臣の張り切り様が眼に浮かびます。在来の事務渋滞が新大臣の引立て役

をしているのでしょうか。

雄々―組閣が終わると、新しく就任した大臣の方針や、抱負が発表されるが、それが実現されないうちに大臣の椅子から去ってしまった、この句のような事はきわめて稀だと思ふ。その稀なところを捕えて成功している。「新しい」が生命。

味平―請願に重きを置く、近來の政治のあり方と、難しさを味うことの出来る句であると思ひます。

好郎―句そのものに就ての批判は各氏の御説にて十二分と思ひます。ただ大臣だけでなく、とかく同じ椅子に事務を執っていると面倒なものは未決のままに置いておくもので平が係長になり、課長と栄進するとその当時は張切つて処理し、すこし椅子が温るとまた逆

もどりする、こういう悪習を戒めた句と頂けば味が又加わると思ふ。

どんたく―許可の印を見てはじめて新しい大臣の名がわかったりして―

雄々―新大臣の腕のみせどころと言えましょう。この張切つた、旺盛な実行力を何日までも忘れないように、国民は望んでいるわけで、そこに句が生まれてきます。大臣の痛いところを軽く衝いた句の面白さがあり句のよさがあるように思ひます。

味平―大分、賄賂も使つたし、申請もした、請願に請願も重ねては来たが、一向に許可が下りなかつたのに、閣僚の椅子が、更迭せられると、一ベンに許可が出たことについては、いろいろに面白くも考えさせられますが、この界限

では、ありがちなことで、こんなことは、しきたりともなっているのでしょうか。そこを軽く、皮肉つて、詠まれたものと思ひます。

山脈の正直たがい水に分

舟遊

好郎―写生句としてもおもしろいところを詠んでいる。仕事も利益報酬も独占せず、各自の能力に応じ分け合う。指導経営者もかくありたきもの、相互扶助で働きたいものである。正直もこの正直が欲しい。

どんたく―水は自然の方則に従つて流れる。何のインチキも無く、情実も無く、格調の高い句と感しました。

雄々―自然現象に比べ、人間生活では、みにくい争が続き大変な相違である。一読して好感がもてる句です。

味平―路郎師の「一握りあ人生は和にしかず」が、ふと思ひ出されて来ます。

好郎―山脈ならこそ黙して水を分け合っているが、それからが問題で、どうか峠も阪も樹木も川に入るまで正直に水を分け合つてほしいものである。山脈と水によって人間世界に教訓を垂れ、豆秋氏の「みの虫のなんほ逼りても壁だつた」のようにみの虫を借りて人

生を詠む例は沢山あって面白い。深味のある句がありますが余程練つて作句しないと平凡な自分よがりの句になり易い。舟遊氏のこの句は着眼点もよく、一応成功されていると思う。

どんたく―それにつけても富士山上の所有権問題の醜くさが思われまます。

雄々―写生句として、ねらいが良かったので成功していると言ひ切れます。私はこの句を読んで、私も今後、こういう傾向の句を作つてみたいと思つております。

味平―黙々として、大自然にさからうこと知らない、山脈の雄大さがしのばれて、後味のよろしい句と言えまます。

抑留以来丘の夕陽に感傷す

夢 虹

好郎―夕陽に限らず万物は一定した意志も表現も持っていない。それに接する人の心によって種々に解釈せられ決定づけられているところを詠んでいると思う。夕陽に感傷する気持は抑留者独自のものであろう。夕陽に対し、昇天しつつある朝日を通し今日に感謝することも忘れてはならない。新進作家として常に佳句を見せてくれる一人である。

どんたく―夕陽は人の心を感傷

的にするものです。恋人と別れた街かどの夕陽、試歩路で見たサナトリアムの夕陽、まして抑留経験者にとって異国の丘の夕陽の思い出は――。

雄々―下五「感傷す」で説明的なきらいがあるようですが、味平さんのご意見を伺おいたと思います。

味平―上五の「以来」で、あまりに、ぎよぎよしく詠まれているので、一層に、感傷句の思いを深くさせられます。

好郎―味平氏、雄々氏の説御尤もと思えます。成程少し句の表現に生硬なきらいがあり、「感傷す」が何だか胸にこたえる気持がします。と、「丘の夕陽に感傷す」をもっとどう感じたかハッキリ言い現わそうとすると月並な句になって仕舞う。上五に「抑留以来」という堅いところから始まっているのであとがくだけで仕舞わないように「感傷す」と表現されたものと頂いておきましょう。

どなたか―好郎氏説に同感。雄々―「感傷す」が気にかかりますが、好郎氏の言われることはよくわかります。

味平―作句上の硬、軟は別として、夕陽に対して、押し詰めた作者の感情の現れが、こう表現させたものとすれば、この句は、この

儘で、頂いても差支えないと思えます。

○ 金持の方が集金でこずらせ

― 声

好郎―代金回収、寄附、会費等の集金には誰もが経験することで作者もその一人として詠まれたのであろうが、句材は新しいとは思えない。「てこずらせ」でやっと救われている程度。むしろ「てこずらす」であろう。半分呉れたら上々と思うていたら意外にもあっさりと予定の倍もボンと出してくれたうれしい驚きを句にしたらと感した。

どなたか―集金人をてこずらす位でなければ金はたまらぬものらしいですね。

雄々―金持の心理を見抜いたような句で、出しおしみをする金持の姿が浮んで面白い。また金持を詠んだ句には、えげつないほど後味の悪い句が多いようですが、そういう事もなく、すっきりした感じを受けます。

味平―何時の代になっても、錢を、勿体がる癖の金持の根性が、屈託もなく旨く、すらすらと、詠み熟されていると思います。

好郎―皆さんあっさりとお褒めいただけますがどうも原句のままなら私は句として新鮮味がないと思

います。まあ少し川柳を作り出すとこの境地は作句されます。御説の通り金持の気持ちを後味よく作っていただけることはわかりませんが、やはり「てこずらせ」がやっと思えます。

どなたか―何だかあっさりし過ぎて、いきなりお茶漬を食べたような気がします。

雄々―以前、私のところの句会で、「金持」と言う課題吟の選をしましたが、さっき申しましたように、後味の悪い句が多く、川柳作句の難かしさを痛感したわけですが、この句は、そう言う関係が川雑誌上で拝見してから印象に残っておりまして。若干、月並なこと無いはないが、すっきりとした、明るい句だと思います。

味平―「てこずらせ」が、好郎氏の評される通りに、この句の生命で、新鮮味にも欠けて居りますが、これ位で、金持ちばかりを、いじめないでくださいませ。

○ 目薬をさす顔課長の顔でなし

実男

好郎―しかつめらしい顔、どんな課長を見ている部下がくすくす笑い、冷笑するさまを詠んでいるだけでそれ以上のものでない。目薬をさす顔を部下に見られまた元の課長顔になり、部下もまた黙々

と事務執る顔に復した。課長対部下をもう少し突込んで詠めば面白い。

どなたか―課長も人の子、目薬をさすこともあるでしょう。しかし課長と云う肩書が目薬をさしているからおかしいのです。そして課員達はくすくす笑いながら潜在的に優越感を味わっているのです。たしかに川柳の場面なんです。少し型にはまり過ぎたように思います。

雄々―日頃、いかめしい課長が目薬をさしたら、目薬が涙のよう見え、泣顔とそっくりとなった

酒 清



灘・魚崎
大塚合名会社 醸

ので、平素の課長の顔と違ったように見えた――と、解釈したが、何か迫力に欠けるようです。

味平―目新しい、写生句でもない。目薬をさして、眼をつぶった

課長の顔が、花祭の甘茶仏の顔に似て来たようにも思えません。雄々さんの評される通りで、どこか迫力にも欠けていると思えます。

好郎―「課長の顔でなし」と、うまく逃げていられるところが取柄でしょうね。甘茶仏の顔だとか、おかしいとか、にくらしいとか云ってしまえば簡単に没になるでしょう。課長の顔もさることながら、それを横目で見ている平の顔もあまり感心した顔でもありません。人の欠点に目がつきそれをあざ笑う時は自分もまた欠点であり、あざ笑われる一人でもあります。

どなたか―顔を意識的に重複させたところ調子のよい句と思えます。

雄々―下五「顔でなし」と言い切ったため、かえって句が弱くなっているのではないですか。また、課長が目薬をさしても、ことさら珍らしがる事ではないと思えます。

味平―あまりに、あっさりと思われているので、目薬をさして居る課長の顔が、どんなであったかと、想像しては見るのですが、いかつい、常とは違った間の抜けている顔であったことと思います。どうか、何時までも、この課長さんは、目薬をさしているような顔でありたいと望みます。

(担当・真鍋一瓢)



勾当の内侍

富士野鞍馬

思っていたのである。

こびりついて楠に留守と云へ

(拾五・タル三〇)

出ぎらひは内侍拝領からのこ

と (万安八)

官軍の総大将は朝寝なり

(拾五)

と、そのべたつきぶりを詠ま
れている。

楠が来ると簪を内侍立て

(拾五、タル三〇)

楠がどうかしようとい侍いひ

(拾五)

また正成をけむったく思っ

いた。それを「太平記」に

「去んぬる建武の末に、朝敵西

海の波に漂ひし時も、中将この

内侍に、暫しの別れを悲しみ

て、征路に滞り、後に山門臨幸

の時、寄手大娘より追落され

て、そのまま寄せなば京をも落

さんとせしかども、中将この内

侍に迷ひて、勝に乗り疲れを攻

むる戦いを事とせず、そのつい

え、果して敵のために国を奪は

れたり。誠に一たび笑みてよく

国を傾くと、古人のこれを戒め

しも理りなりとぞ覚えけり。」

とある。川柳はこれをいろいろ

ろに想像して、

勾当の内侍兜の緒を緩め

(万安四)

勾当の内侍鎧を引っかくし

(タル一)

勾当に見抜かれ給ふ内兜

(〃一四二)

戦さに出るがいいのさと内侍

すね (〃八一)

新田の陣ぶれ又今日も御延引

(〃一五七)

と、義貞のこびりついていた

様が作られている。

ひとりでは亡びやしようとい

侍いい (拾五)

なからはんじゃくて義貞する

け出し (〃六)

勾当の内侍で番が大狂い

(〃五)

出陣もせず内侍とつくし也

(タル一五)

九州(筑紫)へ逃げた足利

尊氏を追うこともせず、義貞

は内侍と恋のささやきばかり

していたように川柳にも作ら

れている。

つくしへははたでもおやりな

んし也 (タル一五)

こびりついて居ると筑紫の忍び

み (タル九八)

勾当の内侍因果と美しい

(タル六)

「太平記」に

「此の女房は、頭の大奉行房の

女にて、金屋の内に粧ひを閉ぢ

鶏障の下に媚を深くして、二八

の春のころより内侍に召され

て、君主の傍らに侍り、綺羅に

だも堪えんす貌は、春の風一片

の花を吹き残すかと疑はる。紅

粉を事とせぬ顔せは秋の雲、半

江の月をはき出すに似たり。」

と、その美人ぶりを書かれて

ある。

この美人が、後醍醐帝から

新田義貞に与えられたのであ

る。

根き寄らんせに義貞もくらひ込

み (タル九八)

来なんしの見得で内侍は陣羽織

(〃一二四)

それを京言葉や、廓言葉で、

川柳は洒落ている。また、

勾当に目を無くなした左中将

(タル一〇一)

色に目がなく勾当に御迷い

(〃一一六)

と盲人の位階の「勾当」を利

かせて「目がなく」などとも

詠み「左中将」は義貞である

楠は美しいのを立ておろし

(タル九)

貰いけり楠ひとり頭痛にし

(万安十一)

義貞は、この美しい愛妾に

へばりついて、肝心の軍事を

おろそかにしました。それを

楠正成はいつもにがにがしく

とある。川柳はこれをいろいろ

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四番

いひ (万安四)

義貞の部下に畑六郎左衛門

というのが居た。それで、九

州へは畑でもやっておけばい

いでしようとい侍が云っただ

ろうとうがっている。また足

利方のスパイがこの状態を偵

察しただらうとも詠まれてい

る。

九州(筑紫)へ逃げた足利

尊氏は、その後勢力をもちか

えし、京都へ押寄せ、後醍醐

天皇と和睦して、幕府を開い

た。義貞は越前の金崎城に拠

り、藤島で戦死した。その首

は京都で獄門にされたが、

「太平記」に

「内侍の局、これを二百とも見

る。」

たまはずして、傍なる築地のかげに泣き倒れたり。」

とあり、日が暮れても、草原に泣き伏した内侍は起きあがるうともしなかった。付近の寺僧が憐んで、その寺へ保護したが、その夜のうちに剃髪して尼になり、義貞の菩提を



川柳人と ユーモリスト

不二田一三夫

だれに聞いてもどこの雑誌を開いてもユトモア味のある句がすくないと云う。

俳優でも三枚目はむずかしいように、気品のある喜劇役者はなかなか出てこないものである。ドタバタ喜劇の川柳なら誰にでも作れるだろうが。

ところでボク、戦後ある新聞社のユーモリスト十傑に選ばれたことがあった。そのころやっていたことと川柳人は同種族だと思っていたのだが、サテなかへはいってみると、川柳人にユーモリスト

叩いたと伝えられている。一説には悲しみのあまり琵琶湖に投身したともいわれている。

尙当の愛に南の枝が折れ

(タル一三八)

と、そのために南朝の不利となったと川柳は詠んでいる。

はほとんどと云っているほど見あたらないにはおどろきだつた。

川柳と滑稽——こんな先入感がボクの目算をはぐらかしたのであるが、川柳人は常識人ということに考え方を訂正した。それともう一つ、正直一途の人が多いことだ。だからユーモリストよりも生まじめな人のほうが多いのうなずけることである。

喜劇役者には、むかしから変人が多かった。チャップリンなども哲学者だそうだし、ボクの知って

いる喜劇役者には病的なまでにきれいな好きや、ステージであればドタバタ騒ぎを演じるのに、面と向って語りあえばモノも言えないハニカミ屋があった。

ゆえにだ、案外川柳にユーモアの句がすくないのも、作家が常識人でありすぎるのではないかと、と考えてもみたいのだ。

「ユーモア賞」受賞の 出羽錦

大相撲の土俵上でそのユーモラスなら大横綱である出羽錦が、「ゆう・もあくらぶ」からユーモア賞を昨年もらったことはご承知の方もあることと思う。

本名は奈良崎忠雄といつて大正十四年七月、東京都墨田区の生まれである。三十六歳といえは大相撲ただ一人の大正生まれだ。

初土俵が十四歳（昭和十五年五月）だからその力士生活も二十数年というベテランだ。三役の地位を十一回（五月現在）もエレベーターしているのも一メートル八一、一四一キロという巨体がモノをいうのだが、いわゆる大家となつてもあのユーモラスな土俵ムード

は絶賛に価するものがある。

あれほどのベテランだからアンゾリ返っていてもいいのだが、そこに出演錦の人柄がうかがい知れるというものだ。それでいて後輩の世話もよくするそう。

新大関佐田の山が綱を張るまで頑張りうぜと、老人組？の大晃と二人で太刀持ち露払いをするのだと聞いたとき、ジンと胸にせまるものがあつた。

土俵経験からいけば佐田の山など、出羽錦や大晃から見ると赤ん坊のような者なのに、その太刀持ちと露払いをつとめることに土俵

生命を賭けているというのだ。美しい話ではないか。入門講座担当の清水白柳氏などもおそろくこのような愛情を誌面にそそいでいられるのだとおもう。故須崎豆秋氏などもそうだった。ボクなどよくかばっていたものだ。

ちょっとワキ道へそれが、出羽錦の「ユーモア賞」というのは、塩をまくことでは角界随一の若秩父が土俵へ上がると、雪の土俵を思わせるほど真白に塩をバラまくのだが、出羽錦が取り組むときは、その対照的にこれはまたち

よいと指先きに塩をつまんで土俵へ上がるユーモラスさを買われたようである。若秩父が花吹雪のように散乱させば、こなた出羽錦はホコリをつまんでするようにつとまくそのタイミングのよさに館内がわくのである。イヤこれは大した千両役者である。

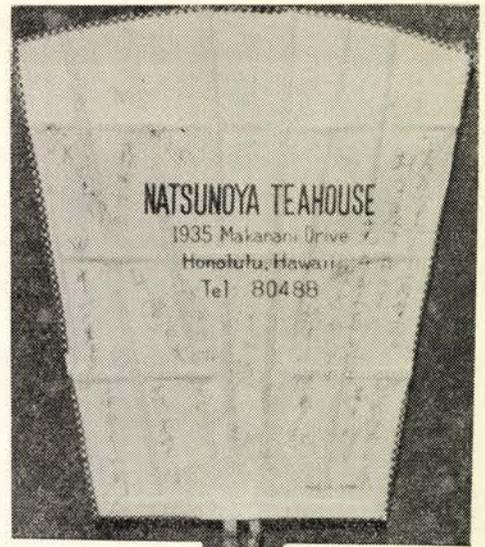
彼の左半身の構えから、相手が太鵬であろうとフチかましていかぬ守勢の攻撃に、何か川柳的なムードにつつまれるのだが、勝敗にこだわらぬよさはほのほのとした句を見るように心があたたまるのだ。

もし、佐田の山、出羽錦、大晃の土俵入りが実現すれば、正にそれは一句の川柳だとおもう。

疲労・食欲不振・神経痛・便秘に



武田薬品



多志氏を囲んだ川柳ハワイ支部の方々の寄せ書き

私を見たハワイ

(三)

若本多久志

ハワイの句会
川柳の畑へ肥料やりにゆき
やがて芽をふいてハワイに
花が咲き

証・川柳翁辭世句に五引用

今度私のハワイ行き目的の一つに、路郎先生のメッセーヂを持って川雑ハワイ支部の方々にお目にかかるという仕事があり、前以って先生から支部長の快夢起氏へご連絡があったので、ホノルル空港へ着いた時、同氏を初め北海・魔花麗・平八郎・十四・あき坊の諸氏がお出迎え下さった。

従兄夫妻の出迎えは予期していたが、この柳友達一然も

誌上でお名前を知っているだけの暖い歓迎には、びっくりするやら嬉しいやら、一人一人からかけて下さった腹郁たる香りのレイを顔も埋まらんばかりにして、胸が一ぱいになり「よき哉、川柳」「懐しき哉、趣味の友よ」の感を深くした。

友情のレイ川柳が匂うて来私の訪布まで延期して頂いた支部の新年句会はウエルカムパーティを兼ねて一月廿六日夜、ホノルルのアレワハイトという小高い山の手地区にある見晴しのよい日本料亭「夏の家」で開催された。参会されたのは快夢起・魔

花麗・北海氏の外約二十名、大半は私と同輩の方が多かったせいか、国こそ異れ、同じ血の流れた、然も同じ趣味に生きる人々として、実に心暖まる思い出の句会であった。最初に路郎先生のメッセーヂを代読し句会に移った。

兼題は「外遊」と「肩書」で二つとも私が選をして、一句一句に選評を試み、大へん喜ばれた。

三光の入選句は
天 外遊をさせて女と手を切
らせ
同 肩書が笑えぬ顔にしてし
まい
地 あちらでの話は英語もチ

ヨット混ぜ 沈丁花
同 肩書の重味に耐える気の
疲れ 南海
人 外遊はただ雲ばかり見て
帰り 万里歩

同 稲荷にも肩書があり正一
位 快夢起

尚、路郎先生からの心のこもった直筆の短冊を皆さんに配って一応句会を終り、宴会は純日本料理、酒は灘の生一本というところで皆さんのおはこを聞かせて頂いたり、音痴の私まで謡曲の一くさりを出さされる始末。故国の柳壇の話や、世相の移り変り等、次から次と話題はつきず仲々の賑いであった。終って皆さん

んの健康とご健吟を祈る旨挨拶し、北海氏の車に送られてホテルに帰ったのは十時過ぎであった。

後からのお便りによると、ウィロー社のスポンサーで今年度、お隣りの島カワイにも川雑支部が出来、二月中旬に創立記念句会が開かれた由。

こうして海外に種をおろした川柳の芽が次々と成長してゆくことは、日本の川柳人にとって何とも言えぬ喜びであると共に、我々は出来る限りのご援助をしなければならぬいと痛感した次第である。

海外での川柳といえは、サンフランシスコの児玉不村氏が私の訪布を知られて、「是非、ホノルルから一飛びしてくるよう、シスコの柳人拾数名で歓迎句会を開く用意がある」という要請があったが、悲しい哉、ドルの割当が乏しくご期待に副えなかつたことは残念であった。

又ホノルルのライオンズクラブで私の通訳をして下さった、松井登太郎氏(金融会社々長)が「川雑」の古い愛読者であったことを承り、私の出版した「親ごころ子心」

に対しても、有難いご高評を頂いたこと等、川柳人としてこの上もない歎びと誇りを感じた。

キッスの味

還暦の頬ほろ苦いキッスさ

れ
皺くちやの顔がキッスで若返り

初対面のキッス、別れのキッスと大衆の面前で公然行われるキッス風景は、只映画でおなじみだけの私が、生れて初めて人前で若い娘さんにキッスされた驚きと、ほろにがい感激は忘れ難いもののひとつであった。

それはホノルルの陸海軍青年会館でライオンズクラブのミーティングに出た時のこと。外国からのゲストは私と一行の丁氏だけだったので代表して挨拶に出たところ、そのクラブのホステスであるハワイ娘がレイをかけてくれて、いきなり唇をもってきてアツという間にキッスされた恥しさに（嘘をつけと言う勿れ）

パッと顔にもみじを散らした

風情は、皆さんにもお目にかけたいくらいだった。

もう一つはオアフ一周コースにあるクロウテングライオンの食堂で——これは商魂逞しいホノルルの写真屋さんの演出だが、このレストランへ食事に来る誰彼となく、一人一人にハワイ娘がレイを掛けてキッスをしてくれる、そのシーンを写真屋がパチパチリとやって、翌朝滞在のホテルへそのスライドを売りにくるといふ仕組みになっている。

オンリーードルのお土産にしておは効果的だが、キッスの味は前記に較べてやや味気ないものだった。

なお残念ながら、夜の女性からのキッスは一度も受けなかったことを為念。

旅の情

外国だから親切が身にこたえ

言われないとこは手真似でやっておき

一輪の花が旅情を慰める
旅先で受ける親切や暖いサ

ーピスは、その旅行を楽しくさせてくれるばかりでなく、嬉しさがひしひしと身に沁みる。殊にそれが言葉も充分に通じない外国である場合、忘れぬ思い出にさえるものである。

一番有難く思ったのはホノルル美術館の主事、ビイラーさん（婦人）と受付係の女事務員さんのことである。そこを訪問したのは、昨年春に尼崎ライオンズクラブが世界児童絵画展覧会を催した時、いろいろお世話になったそのお礼にお伺いした訳だが——日本人の守衛もたくさん居るところだし、会話には不自由なしと甘く考えて行った処あいにくその日は通訳をしてくれる者が一人もなく、受付から単語と手真似でやらねばならぬ破目となった。

受付係の婦人は前日の連絡で訪問の意味が解ってくれていたもので、館内の各部屋毎に「日本語を話せる人はいますか」と訊ねあるいてくれたら、ビイラーさんは「リイデングなら出来るのか」と訊ね「少々は」と答えると、説明

書を持ってきて、いちいち噛んでふくめるように読んでくれ、どうしたらこの小さい日本人に各国の古美術が解らせるかと、いろいろ苦心をして下さっているその努力たるや、実に涙ぐましい程でこちらは身も縮まる思いであつた。

特に一般に公開していない部屋へも案内して下さっての説明に、私が一つ一つ諒解したような返事をするの大変うれしそうな表情であつた。

終つて受付に戻り先の老嬢に「タクシーを呼んでくれ」と頼んだ処、あっちこちのタクシー会社へ電話をかけてくれている、その通話の片言、片言で推察出来たことはどうも「日本語の話せる運転手の車」を捜してくれている様子だったが、果せる哉、迎えに来たタクシーは日本人運転手で、何不自由なく、自分の行先を告げることが出来、ヤレヤレと思つた。

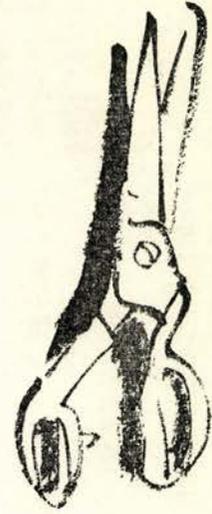
こんなに何から何まで行届いた心遣いをして下さった外国婦人の親切には、目頭が熱くなる思いだつた。

とだけのように思い勝であるが、ヒロのウキラウホテルに泊った時のこと、夕食後、市の公会堂でフラッシュを見物して宿に帰り部屋に入ると、ベッドの枕の上に何やら置いてある。見ると小さなメモのような紙片に、土語で「ナモエ、オエ」と書き、下に英訳して「ブリーザント、ドリーム」と印刷され、その上にハイブリベシダーという、とてもいい匂いの花が一輪のついている。そしてその強い匂いが部屋いっぱいになり満ちて、いかにも楽しい夢路が迫れそうなムードである。

この心憎いばかりの無言のサーピスには只頭の下る思いと、マネジャーの教養とアイディアに対し敬意を表した次第である。

この外、ホノルル空港で荷造りを手伝ってくれた若い航空兵の親切、キラウエア火山観測所で、わざわざ、日本語新聞の切り抜きを持って来て説明してくれた所員の公僕ぶり、ワイキキの海岸で波乗板を貸してくれたアメリカ青年のザックバランスな親切ぶりが、忘れられることの出来ない旅の思い出であつた。（終り）

筆ターミナル



川柳雑感

八木摩天郎

正岡子規が生れざりせば、日本の歌壇、俳壇は、若し、剣伎が柳風狂句の久しき因襲ぶりを攻撃して、柳多留の正統を起すべく、作品として起たざりせば、現代川柳の行方は「など思う時がある。」

蓮如上人は常に、弟子達に申さるるに「御身達は折にふれ」、事に當って、目にし耳にした何事にあれ、必ず書き止めて置くものぞ、それは乾度、他日我、人共に役立つものだ」と。私には川柳がある。私の川柳は私の歴史でもある。

私が中学の頃、西洋史の時間に、教壇を歩き乍ら、「若し、クレオパトラの鼻が低かりせば、若しナポレオンが仏蘭西に生れなかりせば世界の地図は、どう変更して居たかも知れぬ」と云った先生の言葉は、今も忘れられない記憶として耳に残っている。「若し、

御越し頂くのであるが、その機関紙の巻頭に、市長として或はその席上に、市友会の顧問として河盛安之介氏は「市友会の」会員であり、川柳の巨匠である麻生露郎さんから掛軸をいただいた、私は非常に愉快でした。

古くとも僕には仁義礼智信とあったからである。私は今も老軀に鞭打って、第一線で立ち働いている。だがその接触面で、認識を改めねばならないことが屢々ある。しかし、それ等を判断し、処理して行くのは古くとも「仁義礼智信」が貫ぬかれていなければならぬと思う。この頃の言葉でいえばバック・ボーンであり、古い言葉でいえば土性骨である。千古交らぬ土性骨を次の世代に伝えていくところに我々老人の生存意義があると私は考えている。市友会の旧友各位も、老いたこと、古いこと卑下することなく、自信と誇りを以って、元氣よく世のために尽せと。味うべき言葉を耳にした。それは昨年十一月の事だった。

堺市友会と云う、かつて堺市役所に勤務した人の会がある。麻生先生も、つとめて御出席下さるし、河盛堺市長さんも、つとめて

一夕書齋に閉じこもって、天才小島六厘坊の句に親んだことがあ

簪の赤い哀れや子順礼
梅に住むオールドミスと唱

はれて

夕桜迷はせ者の影が映ず
迷宮を辿りく〜て五十年
秋の暮鳴さぬ採木つかぬ鐘
春の潮徐福の舟は今過ぎて
紫陽花に鐘の絶間の雨細し
十六才の時法隆寺へ行く

法隆寺にて

金堂の灯火細し春の雪
能登の守鶉程は飛び上り
腹の子は暗へ娘は縁につき
火に思ひ出もなき淋しさよ
見込れば長く短かき過去の影

世に馴れて嘘も誠も面白し
人の世をさらば〜と花が
散る

嗚呼この句は、五十有余年の昔、若くして死んだ六厘坊の句だ。しばし感無量、時計は正に十時を打っていた。

私のこと

今西生薑

山王町には親分が多いが、或る時今は完全に稼業から足を洗った親分の一人が私を山王の三奇人の一人だと名付けた。三人は薬剤師の私と医博と弁護士である。その内の医博君が私にその理由を聞いて

たので、三人共言い出したら引かんで皆から敬遠されていると云う事だと云うと、それなら仕方は無からうと苦笑いをしていた。この医博君が医院開設の時、医院開設届の医業の目的欄に仁術のためと書いて府庁の医務課を手こずらせた。勿論この欄には馬鹿らしい「医業開設の爲め」と書くことになつている。医博君が文句を附けるのが当り前である。

然しこれ以外にも少く共もう二人奇人がいる。一人は医博(耳鼻科)一人はギリシャ哲学の洋書輸入屋である。いずれも一荷かつげば棒が折れる類である。今では趣味が分れ医博君二人は写真、私は川柳、弁護士君は酒と未婚が趣味、ギリシャ君は趣味が多くて半年ともたない。人のことばかり書いたが、私にはもう一つの趣味がある。宿命判断である。何んだ迷信かと云う方々も居られよう。宿命判断も哲学と云う人もあるが、そんな事はどっちでもよい。私は一種の統計学として研究した。

かなり合う自信があるので、他人を見る指針として使っている。迷う者は来たれ。金はとらない。まだもう一つの趣味がある。パテント申請である。現在ハーモニカ四種、カメラの簡易視差矯正具、外にハーモニカ二種抗告審判

を請求している。登録になつて五種類ともパテントが売れないので宝の持ち腐れであるが、曾て朝日新聞でハーモニカ博士などと書かれた事があつた。

処でこの申請は書類も図面も全部自分でやり一切弁理士を頼んでいない。こんな事は大して自慢にもならぬが、その考案が全部二日で完成した。これは自分ながら全く不思議な現象である。しかも物莫さな私の性を發揮した？試作品がないのである。一種だけ友人が見兼ねたか、バテントが取れたから試作品を作ってくれたのである。

私には二日間と云うのがどうも縁があるらしく、丁度この文を書く一週間程前垂鈍氏が来られ、私が寄稿した柳都川柳三月号の拙文「川柳とリズム」について二三時間閑談した。その時垂鈍氏におだてられて何か書こうと云う刺戟を



川柳まつりの
出句／＼切は六
月末本社着便
です。お早く

受けた。

とうとう意を決して「愚の詩」をまとめるため二日間原稿を書き続け約九十枚に纏めて見た。いず

れ皆さんの批評をたまわりたいと思つているが、二日のいんねんはどうも私の影かも知れないような気がする。

☆

沈丁花の幻想

林 夢 虹

日記を見ると十四才の時だつたことがわかる。病気で学校へ行けなかつた私は、まだあまり陽差しの強くない春の一と月ほどの間、近くの神社の森へ、一、二冊の本を持って陽なたほっこりに出かけるのを日課にしていた。

その日は春にしては少し暖か過ぎる日だつた。芝生に寝転んで本を読んでいた私はいつの間にかねむってしまったらしい。

ほほに冷めたいものを感じて、あけた私の目一杯に女の人の顔が映つた。私とその人はよく知りあつた人のように、じいっと見つめあつたまま鳥の声を聴いていた。真つ黒な瞳がふくらんで、ぼたりとはへ涙が落ちて来たとき、私ははつきりと目がさめた。ははがかつと熱くなつた。その人もは

はを入陽に照されたちぎれ雲のように朱に染めて、そつとははをぬぐつてくれた。私のははその時

の感觸を今でも憶えている。

あわてて起きあがつた私の体から、その人がかけてくれたらしい羽織がすべり落ちた。

その女の人は、私によく似た男の人の写真を見せてくれたように思う。

翌日から三日ほど雨の日が続いた。前日までの雨がうそのように晴れた日、私はひそかな期待に胸をはずませて、森へ出かけて行った。

その女の人はいつも私が背をもたせかける杉の木の木根元に腰をかけていた。私は足音をしのばせてうしろの方から近づいていった。そのうしろ姿の淋しさに、大人の世界を見たように思った。

その女の人が私を深く抱きしめて、「私は明日、お嫁に行くの」といったとき、髪に差していた沈丁花が強く匂つて来て、私を白いベールにつつんでしまった。

その日のことは、その女の人の足袋の白さが印象に残っているだけで、私の視覚の記憶はない。

×

その女の人が去って行ってから、あとに落ちていた沈丁花をひろって帰って庭にきしておいたのが今では、一かかえはどの木になつている。

「川柳家戸籍調

べ」に掲載され

た芳名録 (三)

- 河添一文字(大阪) 田中彩秋(大阪) 森東魚(東京) 広川番翁(神戸) 斉藤利剣坊(福島) 安井ひろし(大阪) 大谷五花村(福島) 前田五健(松山) 大久保大夢子(大阪) 酒井鎌月(神戸) 篠村力好(大阪) 渡辺三四(静岡) 高木夢二郎(北海道) 高橋手腕坊(福島) 北沢製菱雄(長野) 森半豊(満洲) 津田耕水(岡山) 神尾三休(渡島) 富士野鞍馬(東京) 斉藤丹三郎(東京) 桑島文糸(石川) 中見光路(大阪) 源代雪洞(石川) 西島〇丸(東京) 金津穂波(松江) 山川白蝶(大阪) 山川草木(長崎) 松丘町二(松江) 三村叱咤郎(岡山) 揚井二郎(神戸) 戸倉南(神戸) 戸倉普天(兵庫) 沢井朱唇子(大阪) 久方清宵(島根) 村上余念坊(横浜) 清

水美江(埼玉) 一色翠月(兵庫) 藤井樽薫(大阪) 安藤花蝶(安東) 上村金鉄子(石川) 足原百々郎(島根) 塩咲益男(函館) 大空天痴人(島根) 奈良井仙坊(松江) 川上三太郎(東京) 岩本素人(大阪) 松盛翠人(大阪) 嶋田翠峯(大阪) 長谷川一徹(大阪) 安西杏三(大阪) 朝田新水(大阪) 猪野燕柳(大阪) 内藤土筆坊(長崎) 塚越迷亭(大阪) 本田柳一路(石川) 越村加香(大阪) 下川紋十郎(長崎) 本田黄彩(播磨) 宮本銀砂子(金沢) 安井八翠坊(広島) 桑原京郎(京都) 夷川二葉(大阪) 尾添雷相(島根) 村田岡魚(東京)

★ 川雑コーナー

文章に季節を入れる場合は、なるべく執筆当時より二、三カ月後を考慮にいれてください。編集局

「お買物」は近鉄で!!

近鉄

アベノ上六 77-8331

アベノ上六 77-3331

選・声・和



金井文秋

初めて選者にされて誰れでも心配になる事は、ひよっとして良い句を落してはしないかと言う事であろう。悪い句を抜く方は自分だけの恥ですむが、良い句を没にする事は、作家に済まないだけではなく、折角伸びようとする芽を摘み取る事にもなりかねない。それだけに全神経を傾けて一句々々にいんどんでいるのである。それにスピートも要求されるのに読み難い字で困らされる事もある。

そんな苦勞を知ってか知らずか、勝手な事を言う声や耳にする事がある。例えば句はいくら創っても選者の主観で抜かれるから、どんな句が選にはいるか運でずなどと言う人達である。なぜ良い句が抜かれ悪い句が没になると言えないのだろうか。そんな人達に限って、選者が謙讓

な気持ちから好きな句を戴きましたとても言おうものなら憤慨するのである。その為か私も本社句会で初めて選を披露する時にこんな事は言わぬようにと注意された。それでは自分の選は絶対だと言い切れる人がはたしてあるだろうか、選者も神様でないのだから思い過こして買いかぶったり、欠点を見落す事もあり勝ちだ。それをなるべく少くする為に、課題に適當な人に選を頼むようになって、課題に選者の個性や考え方によって、着想に重きをおく人、表現に重きをおく人、調子に重きをおく人などがあつて、どうしても自分の好む傾向の句には甘くなる事もあるし、嫌いな傾向の句には辛くなる事も考えられるが、着想表現調子共によければ没にしようがないではないか。あの選者は苦手だと言う声もよく聞く、苦手の選者や嚴選の選者に認めさすまで努力するのが作家の道ではなからうか。かつて池田さんが蔵相の時貧乏人は麦を食えと言つて国民を憤慨させた事がある。これなどはあまり正直な事を言つた為であろうが、わたしは嘘を申しませんという首相らしいではないか。それと考へ合せると好きな句を戴きましたと言つて選者は正直な人と言えらるだろう。もう一つの例は、今日の選は良かったとか悪かったとか言う人達である。いく

川柳不朽洞会

(六月)

指導

賛助

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|------|------|------|------|------|
| 上田翠光 | 中島生々庵 | 特別会員 | 不朽洞会員 | 奥村丹路 | 戸倉普天 | 中島柴痴郎 | 東野大八 | 沢田四郎作 | 高鷺亜純 | 橋本緑雨 | 麻生葭乃 | 柴谷宰二郎 | 山路閑古 | 山本雨迷 | 田村孝之介 | 洞友 | 恒藤恭 | 島浦精二 | 井上吉次郎 | 麻生磯次 | 中村直勝 | 岩崎辰二 | 田中辰二 | 白川祐吉 | 中川朋吉 | 長谷川一徹 | 長谷川一徹 | 指生路郎 | 麻生路郎 | | | | |
| 直原七面山 | 太田良子 | 友淵貴山 | 長野井蛙 | 国弘半休 | 吉田圭井堂 | 福田安夢 | 羽佐間柳葉 | 藤本満年 | 市岡晚舟 | 築山快夢起 | 西垣錦風 | 井上湧三 | 大坂形水 | 三輪峯園 | 前山北海 | 古川麗花 | 寺井鋭々 | 北川春巢 | 八木摩太郎 | 西無鬼 | 丸尾潮花 | 黒川紫香 | 正木木客 | 松江梅里 | 川村好郎 | 若本多久志 | 土井文蝶 | 市場没食子 | 西尾古方 | 戸田古方 | 木村瓜浪 | | |
| 山本葉光 | 山田季莊 | 山田久米雄 | 益永貞女 | 阿形一杉 | 浜畑胡蝶 | 大西迷窓 | 若林草右 | 長谷川三司 | 大森慎句案 | 服部十九平 | 青木遊星 | 福島鉄児 | 黄瀬美秋 | 岸南柳的 | 阿万魁光 | 林野竹青 | 西辻竹香 | 飯降白舟 | 富岡淡星 | 山根晴峯 | 龜山文月 | 小野喜由 | 大鶴史葉 | 佐野史占 | 増田耕民 | 杉谷湖山 | 弘津柳慶 | 木谷竹莊 | 尼緑之助 | 新川博也 | 徳永雅美 | 小川恒明 | 清木白柳 |

ら良い句を抜こうと思っても、良い句の少ない時はどうしようもない。小集などで初心者の多い時などは満足な句が一つもない時がある。それでもうんと寛選にして抜いて置かないと、あとの出席にも差しつかえるし、選者も嫌われる。

本社のような会では、そんな事はないにしても、題によっては削りやすいものや、削り難いものもあって随分差のあるものだ。良い句の多い時は厳選にしても多くとれるが良い句の少ない時には寛選にしても少ないのは当然だ、それを選者の責任にされては選者もつらからう。ところがあとで考えてみると、名選だと言われた人の選には自分の句が佳吟や三才に抜けていて、悪選と言われた人には出した句がみな没になっているのである。

自分の句をよく見たから名選で、没にしたから悪選だと言われるのは少しどうかと思われる。自信も結構だが、うの字が勝ち過ぎて反省を忘れていゝるのではあるまいか。

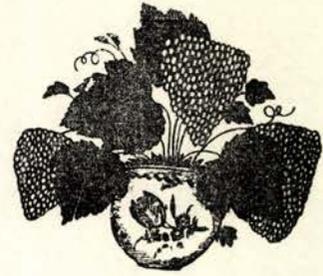
よく似た話でこんながある。自信のある句を或る選者に出したところが没にされた。あきらめきれず選者を四五人もち回った末にやっと選にはいった。曰く「没にした選者は私の句をよう見ない。〇氏はさすがに大家だけある」どんな句であったか私には知るよしもないが、こ

んな想像は出来る。没にした選者は若い人で、句のセンスがなく受入れられなかったのであろう。それをたまたま老大家が見て昔の思い出に何か触れるところがあつたのかも知れない、この人のように熱心ではあるが、反省を知らない作家がところどころに居るから選者もかなり気を使う仕事である。自分の句を見るか見ないかで選者の良し悪しを決められては選者もたまつたものではあるまい。

選をする事は作句の勉強にもなると好んでする人もあり、選ばれば仕方がないとするもある、また選をさすなら川柳をやめると言う程嫌いな人もある。選者に選ばれるのは、水く川柳をやっている人とか、作句の上手な人とか、常識の発達した人達であらねばならぬから、或る意味で名譽かも知れない。しかし自分から選者になりたがり、自分は選者にされないので後輩が先に選者にされたりすると不満の色を表わす人もいる。そんな人を選者にする、まるで自分が偉くなったように尊大な態度になるものである。川柳を上手に削り、句を知つたからと言って、人間として偉くなったと言ふ事とは別の問題であるはずだ。選者も初心者も金持ちも貧乏人も、何んの差別もしないところに川柳のダイゴ味があるのではないだろうか。いつまでも楽しい句会、楽しい川柳でありますように念願してやまない。

酒田清子 樋口舟遊 吉本菁風 山本一傘 杉前南宗 建沼康之 西生葦 室井八九寸 川竹松風 内海敬太 横山一声 関戸宗太郎 高平次弘道 渡辺暁童 平田夷男 井阪東天紅 米虫一乃字 北村三歩 岡嶋芳道 森田多可志 大前鳴忱 村上昌男 林上昌男 野口迷羊 安部立美 中松恒雄 松岡委滄浪 辻柳圭水 西田柳宏子 阿部柳平 平井井平 酒田清子 樋口舟遊 吉本菁風 山本一傘 杉前南宗 建沼康之 西生葦 室井八九寸 川竹松風 内海敬太 横山一声 関戸宗太郎 高平次弘道 渡辺暁童 平田夷男 井阪東天紅 米虫一乃字 北村三歩 岡嶋芳道 森田多可志 大前鳴忱 村上昌男 林上昌男 野口迷羊 安部立美 中松恒雄 松岡委滄浪 辻柳圭水 西田柳宏子 阿部柳平 平井井平 酒田清子

- 楢原一善 田村藤波 稻井三林坊 白葉花潮 下山清潮 本田恵二朗 松川杜的 村上ゆづる 森本法泉子 小池しげお 竹内圭三 松野奇童 浜野幸男 橋本雄声 高崎雄子 高橋操子 藤井明朗 永松東岸 野田素身郎 水藤弥平 神谷凡九郎 清水望峰 木村十悟 伊達堰子 坂田東洋司 志水礼司 不二田一三天 酒井ひか平 深見雅堂 松下京一樓 津秋六花 丸川初甫 笹野旭泉子 笹岡回天子 新岡古心 石居高志 小倉へとち 早川清生 西出栄
- 酒田清子 樋口舟遊 吉本菁風 山本一傘 杉前南宗 建沼康之 西生葦 室井八九寸 川竹松風 内海敬太 横山一声 関戸宗太郎 高平次弘道 渡辺暁童 平田夷男 井阪東天紅 米虫一乃字 北村三歩 岡嶋芳道 森田多可志 大前鳴忱 村上昌男 林上昌男 野口迷羊 安部立美 中松恒雄 松岡委滄浪 辻柳圭水 西田柳宏子 阿部柳平 平井井平 酒田清子
- 酒田清子 樋口舟遊 吉本菁風 山本一傘 杉前南宗 建沼康之 西生葦 室井八九寸 川竹松風 内海敬太 横山一声 関戸宗太郎 高平次弘道 渡辺暁童 平田夷男 井阪東天紅 米虫一乃字 北村三歩 岡嶋芳道 森田多可志 大前鳴忱 村上昌男 林上昌男 野口迷羊 安部立美 中松恒雄 松岡委滄浪 辻柳圭水 西田柳宏子 阿部柳平 平井井平 酒田清子
- 酒田清子 樋口舟遊 吉本菁風 山本一傘 杉前南宗 建沼康之 西生葦 室井八九寸 川竹松風 内海敬太 横山一声 関戸宗太郎 高平次弘道 渡辺暁童 平田夷男 井阪東天紅 米虫一乃字 北村三歩 岡嶋芳道 森田多可志 大前鳴忱 村上昌男 林上昌男 野口迷羊 安部立美 中松恒雄 松岡委滄浪 辻柳圭水 西田柳宏子 阿部柳平 平井井平 酒田清子



片腕

浜田久米雄選

片腕は私生活にも呼び出され 涼人
片腕をあげたまま電車でもみぬかれ 光一
出前持ち片腕で乗るくせがつき 九文銭
アベックの片腕は組むためにあけ どんたく
入墨のある片腕を一寸見せ 静水
片腕の端は刑事が握ってる 圭井堂
気の毒な片腕らしい袖を見る 初甫
人形の片腕むざんな綿を見せ 美由起
片腕でいとやすやすとあしらわれ みのる
片腕で着物の裾に気を使い 雄々
年金の下る片腕いとほしむ ひろし
片腕にすぎる五人の子を育て 秀峰
スピッツの力に片腕抜かれそう 宝泉

一 路 集

片腕が器用にパイを並べとり 静波
本気ではない片腕を振り上げる 与太郎
銭湯で片腕のわけまた聞かれ 藤波
片腕とも頼むと電話悲壮なり 保夫
片腕がおどかしボスが来てすか 宗太郎
片腕と思っっているは主人だけ 暁明
片腕はにぎりこぶしの男泣き 祥月
片腕を伸ばし欠伸の口をあけ 雪美
片腕はビルマへ置いて来た誇り 豊年
片腕にしたいが別の紐を持ち 博友
片腕もおだてて使うことばかり むじな
片腕と信じきられ裏切れず 愛鳩
片腕に惚れた女の名をしるし 古心
片腕にしじれた気になる更年期 好女
首からの紐に片腕あわれなり 卯之助
片腕を引いて座敷へ招き上げ 代仕男
片腕に入墨のある父を持ち 蛙水

おめえたちや片腕だよとおだてられ 恵二朗
片腕にすがれど男払いのけ 雄声
片腕をふるわせつつ酒やめられず 杏花
片腕を捧げた国に小そう住み 素身郎
片腕のつもりを信用してくれず 十九平
片腕と言われ野心がもち上り 孝風
片腕で器用に風呂を浴びており 端歩
人
片腕を貸せとは金の事だった 宗義
地
片腕とおつちよこちよいがおだてられ 虹要
天
片腕が両腕よりもよく儲け 旭峯
ちぐはぐな孫の踊りに手を叩き 好女
ちぐはぐに戻って喰べる子沢山 勝子
ちぐはぐな気持ちにしまつとき 雪美
ちぐはぐな返事で何か思ひごと 愛鳩
ちぐはぐな話になつてボスが出る 孝風
ちぐはぐな話になつてボスが出る 素身郎
ちぐはぐな話になつてボスが出る 素身郎
親と子がちぐはぐになる 民主々義 旭峰
ちぐはぐの色を好んで着る若さ 博友
ちぐはぐな茶碗並んだ叩き売り 利子

真鍋一瓢選

ちぐはぐ

ちぐはぐな皿で農業感謝祭 汝柿
打合せしたにちぐはぐになる話 庸佑
ちぐはぐの靴下でよし子のお古 豊年
ちぐはぐな申開きに角を出し 頑柳
ちぐはぐの二つを寄せて一にし 与太郎
ちぐはぐな時間を過す縄のれん 美郎
ちぐはぐに来られツイッキーまで追加 八九寸
ちぐはぐな心左遷で昇給し 九文銭
煙草屋へ行くちぐはぐの宿の下駄 涼人
ちぐはぐな意見お酒が減つただけ 暁明
仲人の不馴れちぐはぐな式になり たけお
父と母の夢ちぐはぐに子は育ち 光道
ちぐはぐになつてタクトの当惑し 隆文
ちぐはぐになつたも並べ難祭り 光一
新世帯ちぐはぐながら夢を持ち ろ亭
ちぐはぐな答えへ野党食い下り ひろし
ちぐはぐの答えで黒と睨まれる 野迷路

色紙短冊 書画用品 丹室月堂 大坂戎道 中野セシロ

三味線でツイスト踊るばかりしき 隆史
 口下手が又ちくはぐな世辞を云い 涼髪
 ちくはぐに縫って子供は満足し 千甫
 ちくはぐの下駄で飛出すいい話 一鶴
 ちくはぐと氣付かずボタンをちくはぐはめ 静水
 ちくはぐに着ている母のない娘 大八州
 ちくはぐになつた同士で探し合い 杏花
 ちくはぐの言葉へぐつと耐える妻 古心
 ちくはぐな返事を妻がすろは抜き 芳朗
 ちくはぐなほらへ相槌くたびれる どんたく
 ちくはぐな氣持を仲人見逃さず 圭水
 ちくはぐに時計屋の店昼が鳴る 和三郎
 老らくの恋ちくはぐの返事をし 雄々
 ちくはぐの子の絵を天才かと思ひ 宗太郎
 ちくはぐの言葉にぼろが大きなり 句念坊
 つんぼうの云々をちくはぐは笑いかね 藤波
 ちくはぐな文化国家の電化熱 静幸
 ちくはぐな色で仕上る子の塗絵 代仕男
 ちくはぐな供述速記者まで笑ひ 十九平
 ちくはぐな氣持を捨てに来たホーン 卯之助
 神のみが知るちくはぐの披露宴 雄声
 ちくはぐに着たけでなしニューモード 恵二朗
 ちくはぐの言葉に世間すれの顔 照兒
 ちくはぐな男の針で縫い 上り 晃男
 ちくはぐな靴で二次会から戻り 天悟空

佳

ちくはぐな使い集金せず戻り 静波
 捨てるには惜しいちくはぐ又溜り みのる
 最後まで待つちくはぐ履いて去に 雄峰
 人
 叱られて云うちくはぐを又叱り 光郎
 地
 ちくはぐなある夜の父母を子は感じ 美由起
 天
 ちくはぐに履いて楽天家の散歩 虹要

年がい

中村九呂平選

年がいに役立たない将棋盤 恵二朗
 年がいもなくちくはぐな柄を着て 一鶴
 年がいもなくベレー帽の位置を替え 照兒
 この道は別年がいもなく恋をする 季賛
 年がいもなく派手なことちくはぐのけ 痴亭
 いい年をしてと妻からからかわれ 代仕男
 年がいを時には忘れて甘えてみ 初甫
 年がいもなくおのろけのクラス会 照子
 わきまえもなく年がいの口うる 卯之助
 年がいもなくもあるかと恋一途 雄峯
 甚六といわれながらも兄は兄 石峰
 年がいを悟して化粧派手に引き 孝風
 年がいを若い世代とうちとける ひろし
 年がいを忘れた恋に金がいり 豊年
 年がいもなくチンピラに引きずられ 十九平

年がいを おだてて 盗うけて 居り 静波
 年がいに ない 反抗と 笑われる 庸佑
 子の 尻馬に のつて 年がいに 叱られる 祥月
 年がいに なく ぼろ口 に 引つかかり 雄声
 毒舌も 笑顔で 聞ける 年になり 句念坊
 年がいの 稍々 強引な 議長ぶり 曉明
 野暮な 事云つて 年がいに 笑われる 涼人
 年がいを 構わぬ 声へ 袖引かれ 与太郎
 年がいに なく 乗せられた 口車 十九平
 年がいを 語り合つて いる 桜餅 光郎
 年がいに 引込み つかぬ こととなり 千翁
 年がいは 絵筆に 余生の 趣味を持ち 光郎
 年がいに ぬけて 仕舞の 好きな 祖父 九文銭
 年がいを 封じて 仕舞の チェンジャー 古心
 年がいを 高く 買われて 床柱 恵二朗
 てっぺんの 薄さ効かせた 裁きよう 恵二朗
 年がいは 謝る 役を 頼まれる 雄声
 年がいに まとめの 役を まかしたとき 同
 これまで になる 年がいを 自慢にし 旭峯
 敬老の 一言であつさり ほとと 美郎
 お年順 押され 押されて 床柱 野迷路
 引けぬ 意地年がいに 捨てて かつと 与太郎
 古い 古いと 子に 年がいを 笑われて 涼髪
 甘言の 裏見 破つた 年の 効 圭井堂
 年がいで さとせ は ハイテン 口答え 雄々
 年がいに 無く 待たされた いる 喫茶 どんたく
 仲裁に 年甲斐 だけ 物が 云い 野迷路
 年がいの 経験子 等は ソッポ 向き 生薑

品質優良
先カペン
 TACHIKAWA PEN
 ビン カワゼム 紙
 カワゼム カワカ 画
 先カペン カワカ 紙
 先カペン カワカ 紙



大阪市東区常盤町一丁目十一番地
 立川ペン先株式会社

何しても年がいの眼で見られ さい子
 天
 敬老と別に年がい利用され 十九平

年がいに なく させられて する 仕草 静幸
 その 年で それが 解らんかと 小言 藤波
 年がいを 考えなはれと 妬きもせず 恵二朗
 年がいに なく 下手に 出る 先手 八九寸
 年がいと云うのが 時代の ズレで 負け 十九平
 人
 ここで ひとつ 年がいに みる 口を みる
 地
 年がいに なく させられて する 仕草 静幸
 元の 鞘におさめた 年がいに 喜ばれ 瑞歩
 年がいは 過去の 苦勞を 口に せず 恵二朗
 佳

柳一界一展望



句会

▼本社六月句会は七日(木)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。柳友多寂御誂いの上出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)句会は五月二十二日(火)午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)五月十七日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は五月十八日(金)午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪通信病院川柳句会は五月二十七日(日)午前十時半から近鉄沿線河内長野長野寮で青葉吟行を開催。以上路郎主幹出席。▼川維土佐支部五月句会は十三日(日)高知県福祉会館で開催。▼川維みなと支部神戸市吟行句会会は四月二十九日(日)六甲森林植物園で開催。▼故船木夢考追悼句会は五月六日(日)午後一時から敦賀市津内町二丁目船木居で開催。▼第五回豊中市民川柳大会は六月十日正午から豊中市中央公民館で開催。兼題結ぶ・赤飯・竹藪・選挙・正直、投句は六月五日までに投句料五十円封入の上豊

一時から美川町中町中央公民館で開催。▼川柳かつしか創立十五周年併て関根木九(還暦)堀口祐助(古稀)賀寿記念川柳大会は六月三日(日)正午から東京都亀有町二丁目なかや会館で開催。▼川維篠山支部(兵庫県)では交通安全運動に協力、横二〇センチ縦七〇センチの模造紙赤ワツつき安全川柳を書き町内所要所に貼出し好評を博さ



羽曳野川柳会十周年記念川柳祭 (五月三日)

写真説明。前列左から…太康・康子・加茂女・紅・好郎先生・春風先生・弥生・みどり・うらら・恵子・若昏・忠雄。中央左から…雄雨・比呂志・静波・頭柳・雄峯・紀太郎・春生・彌字・力郎・葉山・恵・美郎。後列左から…草春・鏡面・与太郎・春長・幸平・太柳・計雄・万寿・茂男・松山・花風。

中市岡町中央公民館内市民川柳大会係宛。▼第一回石川県川柳大会は五月十三日(日)午後五時、枝葉氏等が大はりきりで活躍されている。▼喜多村草二氏(岡山市)宅新築記念祝賀川柳大会が五月十三日(日)川維部、川維備前支部合同で門田町草二居で開催。▼岡山県吉水町短詩文芸会主催の短歌・俳句・川柳合同大会は五月二十七日(日)吉水町母子センターで開催。▼川柳きやり句会(東京都)では六月一日后六時より千代田区神田東紺屋町毫撰寺東京別院で開催。宿題電波・写真・入梅。▼伊勢柳園六月句会は九日(土)午後七時から千代田生命津支社内土竜庵居で開催。▼川柳宮城野社六月句会は二十日(水)午後六時から東八番丁一七〇後藤閑人居で開催。▼西条川柳大会(広島県)は五月二十日(日)午後一時から西条町西条通り耕道会館で開催。▼出雲大社祭礼の川柳大会に、川維出雲支部の尼縁之助氏、川維木次支部の藤井明朗氏は選者として出席された。なお明朗氏は本社主催の川柳祭(七月)に米阪出席される由。▼故岡田鹿の子句碑建立基金が募集されている。堺市熊野町菅原神社境内に六月中旬竣工予定。一口三百円。送金は堺市南

会が五月十三日(日)川維部、川維備前支部合同で門田町草二居で開催。▼岡山県吉水町短詩文芸会主催の短歌・俳句・川柳合同大会は五月二十七日(日)吉水町母子センターで開催。▼川柳きやり句会(東京都)では六月一日后六時より千代田区神田東紺屋町毫撰寺東京別院で開催。宿題電波・写真・入梅。▼伊勢柳園六月句会は九日(土)午後七時から千代田生命津支社内土竜庵居で開催。▼川柳宮城野社六月句会は二十日(水)午後六時から東八番丁一七〇後藤閑人居で開催。▼西条川柳大会(広島県)は五月二十日(日)午後一時から西条町西条通り耕道会館で開催。▼出雲大社祭礼の川柳大会に、川維出雲支部の尼縁之助氏、川維木次支部の藤井明朗氏は選者として出席された。なお明朗氏は本社主催の川柳祭(七月)に米阪出席される由。▼故岡田鹿の子句碑建立基金が募集されている。堺市熊野町菅原神社境内に六月中旬竣工予定。一口三百円。送金は堺市南

★ホップのきいた本場の味…

ザッポロビール

消 息

▼白川朋吉、菅橋彦両先生の大阪市名誉市民祝賀会が大坂芸文協会主催の下に五月十六日午後二時から生国魂神社々務所で開催され、五月十八日午後二時からは羽衣荘で画家、工芸家文化人等の盛大な祝賀会が開催されたので路郎主幹が二つの会へ出席祝意を表された

不朽の人々



元最高医療院事務局長の市場健次郎氏

曲り角に來ても自然に逆らわず
(没食子)

停年になった今、易を見ても占うとしても占うしてみても、所詮は面白半分過ぎない。ツイストも大流行だが、占も相当のブームである。

僕は自然に逆らわぬよう心がけている。消極的だがそれで今まで、やって来たことを幸福だったと思う。これからも神経を悩ますことは避けてゆきたい。

▼高橋蟬蛇氏(須崎市)は旅から旅に多忙の日を送っていられるが、この度令孫が高知市で結婚式を挙げられた由、およろこび申上げらる。

▼大野木真砂氏(神戸市)は五月十六日脊髄骨折のため金沢病院に入院、ギブスをしての治療をされる由、一日も速かな快癒をお祈りする。

▼岩崎愛二氏(京都府)は前号既報の通り四月十九日藍綬章を受賞されたが「あな不思議どのお祝も酒ばかり」の句を寄せられた。お慶びの様子が見えるようである。

▼藤井明朗氏(鳥取県)は五月五日所用のため上京、車と人のラッシュに大いに驚かされた由。「一人旅をぞろ歩きとは行かず」

▼富士野鞍馬氏(東京都)は五月十三日米沢市の東北川柳大会に招かれ盛会だった由、なお三十年ぶりて白石雅想様氏に会われたとのおたよりに接した。

▼渡辺曉童氏(愛媛県)は教員の異動、新年度始めの計画や報告に多忙を極めていられたが、連休を利用して、阿蘇・高千穂・別府観光の旅を楽しまれた。「しみじみとくにの速さを思う阿蘇」

▼山田季費氏(広島県)は四月十六日付で国鉄鋼材自動車係から需給課需給係に転動された。又、五月本社句会に出席、終了後難波で万的・客遊子の両氏と柳談された。「にぎり寿司大阪の味友と賞め」

▼服部十九平氏(岡山市)は五月十一日沖繩への旅に出発された由

▼山内静水氏(竹原市)は五月二十日に県下西条町の川柳大会へ出席される由。

▼清水白柳氏(大阪府)は五月七日

日家族十二人連れて帰郷宴参された。六日夜は栗津で一泊、一度金沢へ出て帰阪される。「せわしない管一ダース連れの旅」

▼月原宵明氏(松山市)は四月二十五日伊予銀行本店総務部勤務となり着任された。

▼黒川紫香氏(豊中市)は五月三日大阪大手前会館で佐藤知事から労働に関する功労賞を受けられた。およろこび申し上げる。

▼八木摩太郎氏(堺市)は五月一日堺市福祉会館で「老後のくらしとその在り方」と題する市友会の座談会に出席、席上川柳について話され大方の川柳への関心を昂められた。

▼飯降白香さん(奈良県)は歌集「室生川」を発売された。

▼阿部佐保蘭氏(東京都)は五月十三日令嬢の結婚一周年と母の日を兼ね、二夫婦で黒部溪谷に遊ば

れ宇奈月温泉に逗留された。「宇奈月の緑の中の二夫婦」

▼河相すむ氏(西宮市)は五月九日から東京、仙台、新潟へ出張、十三日には蔵王山麓の青根温泉に一泊、新緑の山の気に浸って俗塵を洗われた。「官費では勿体ないと思う景」

▼川岡靈眼子氏(諫早市)は四月五日の長崎時事紙上の自由論談に「予言する靈能者」の興味ある一文を寄せ、靈感所有の日本を代表する若い女性の占師藤田小女姫さんを千里眼の立場から占われた。

▼川端柳風氏(東京都)は最近健康を害し、又、視神経委縮という病に罹るも事欠く好きな川柳のこととて一日もなおざりには出来ぬ気持であると。

▼杉本一鶴氏(貝塚市)は肺手術後専心療養に努めていられるが、新薬サイクロセリン副作用のため

中樞神経を犯され精神分裂症の一步手前まで追い込まれたような気がして不安な日を送っていられると。

柳誌

▼川柳しかご誌が第十七巻六月号から日本の印刷に踏み切り、第一歩を印した。(たべ物の味も夫婦は歩み寄り「露角」などしみじみさせる句がある。御発展をお祈り申上げる。

句碑

▼故前田伍健の十番目の句が新装なった伯方町中央公民館の表玄関に建立。四月三十日盛大除幕式が挙行された。

改号

▼河合宏氏(金沢市)は再度、卯翁と改められた。

住所改称

▼川端柳風氏(東京都)の住所番地が左記の通り改称された。東京都渋谷区本町二丁目四六

▼河本南牛史氏(松山市)の住所が四月一日松山市に合併、松山市石井土居と改称された。

正誤

▼前号二十七頁三段二十五行目の巖谷秀雄氏とあるは季雄の誤りにつき訂正。(薫)

不朽洞会から

- ★新会員紹介
- 五月
 - ▼本多清人(大阪市) 正
 - 梅里氏推薦
- 六月
 - ▼福井野迷路(大阪市) 維
 - 生々庵氏推薦



「頼杖」

入選発表

選者 麻生路郎
投句総数 五百七十二句
入選 五十一句

頼杖で皇室アルバム見る世代

大阪 福郎

頼杖の眼は答案を見ておらず

玉島 不二夫

頼杖で採点をするミス審査

玉島 千翁

頼杖へ二つのコーヒ冷えている

岡山 鉄児

父ちゃんに似て頼杖がねをべって

大阪 あいき

頼杖で居ても社長の眼は光り

大阪 生董

なやみ果なし頼杖動かない

大阪 恒明

頼杖の妓きれいな嘘が言え

岡山 知恵美

お妾の頼杖株がまたさがり

岡山 葵丘

土に生き抜いて頼杖など知らず

岡山 十九平

頼杖で講義を聞いて叱られる

大阪 庸佑

頼杖をついて日曜らしく暮れ

三島郡 清生

忙中閑総理も頼杖ついており

堺 圭水

頼杖がときどき半畳入れくさり

岸和田 きさ子

店は閉はは杖ついて雨を見る

大阪 晃

頼杖のまったく斗志ないポーズ

見島 恵二朗

頼杖が利害に触れてから崩れ

笠岡 白梅子

頼杖のまだ銭形を読みつづけ

西宮 一傘

頼杖の癖動評の赤インク

笠岡 桃里

漫画のような頼杖で支えられ

同

頼杖でまたも禁酒を誓うて居

芦屋 一十

頼杖の視角へ蚤が飛びよった

和泉 東天紅

頼杖のままでも保険屋ことわられ

大阪 大然

母の日をはは杖のババ苦笑する

同

頼杖の隠居へ植木屋智慧を貸し

大阪 十悟

はは杖をついて小金に子を産まし
頼杖の労組代表よく粘り
同 遠二

頼杖の癖は課長になってから
同

頼杖へ酔うた妓がよりかかり
同 真奇

頼杖のついたのも居る消防署
同

頼杖をみかねて散歩しておいで
岡山 藤波

頼杖を外ずして社長判をくれ
同

頼杖のまま陳情はあしらわれ
西宮 牧人

頼杖の前の電話をうるさがり
同

頼杖でゆうべの恋をまだ思い
大阪 春巢

頼杖をおどかすように電話鳴る
同

赤旗を守衛頼杖してながめ
石川 宗太郎

頼杖をして定年を待つばかり
同

頼杖の涙ながれるままにする
大阪 水客

頼杖へ南瓜豆がまだ残り
同

入れた茶へ頼杖ウンと言ったきり
大阪 文秋

はは杖へどうだい思案ついたかい
同

そこを掃きますよと頼杖たたさる
同

五客

総理かは知らんが頼杖とは無礼
大阪 良

頼杖に貨物列車が数えられ
香取 方大

はは杖をつき鳥の愛情を見つめ
大阪 喜仙

袖の下出すまで頼杖外すさぬ気
笠岡 二路

ラブハンター少し疲れてはは杖し
大阪 晃

宿題に親子頼杖ついたまま
神戸 静馬

地ノ句
堺 圭井堂

頼杖をついて貸すとも貸さぬとも
堺 圭井堂

天ノ句
岡山 藤波

頼杖をついて最高給をとり
同

★ 次の特題「帳消し」五句以内
六月十五日

★ 発表 六月二十日(大万店内)
七月号本誌

★ 七月の予告「エブロン」五句以内
七月十五日(発表七月二十日)

★ 投句先 大阪市阿倍野区松崎町
三ノ一〇 大万川柳会

★ 須崎豆秋忌一周年記念句会は五月
月晴れの5月20日(日)一時から、大万階上で路郎先生はじめ多数のご出席があつて盛会だったことは豆秋さんのお人柄をもの語るものであつた。

★ 前号35P二段25行目の句は猫の目と出会い金魚が向きを替え (梅里)

★ と訂正します。(編集局)

昭和37年度(五月現在)
大万川柳ベストテン

一 藤波 二二五 岡山

二 文秋 七〇 大阪

三 静馬 七〇 神戸

四 方大 六五 倉敷

五 梅里 六〇 大阪

六 柳志 六〇 大阪

七 圭水 六〇 堺

八 恒明 六〇 大阪

九 恵二朗 五五 児島

一〇 清生 五五 三島郡

一一 晃 五五 大阪

一二 好郎 五五 大阪

一三 良 五五 泉北

一四 圭井堂 五〇 堺

一五 遠二 五〇 岡

一六 清人 四五 大阪

一七 水客 四〇 大阪

一八 十九平 四〇 岡山

一九 東天紅 四〇 和泉

二〇 桃里 四〇 笠岡



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 五月旬会 (大阪府)

5月7日 午後6時
会場——千日前自安寺

ゴールデンウィーク明けで出席率が危ぶまれたが前月を上回ったことはありがたかった。欲を云えばもうすこし古豪連のご出席が待たれることである。

路郎主幹・慶乃女史は風邪をおしてのご出席である。それに応えて活気ある五月旬会だった。

春菜氏久しぶりの柳話は、リバイバルをテーマに、リバイバルを詠んだ句を興味深く集められた。

五月の不朽洞賞杯は金井文秋氏の日ごろの努力にむくいられ堂々の獲得となつた。(F)

出席者——路郎・静馬・黙平・圭水・和郎・圭井堂・専翁・晃・紫香・八郎・柳宏子・いさむ・梅里・春菜・真砂・青風・たねお・客遊子・柳志・瑞歩・舟遊・正一・繁雄・満秋・泰泉・野迷路・清風・眉水・生々庵・多久志・古方・万的・

す・む・文秋・種雄・清人・あきら・雄声・いわを・進之助・夢虹・薫風子・季賛・庸佑・榮・尚史・良一・一三夫・阿茶・行人・宏子・慶乃

兼題「十字架」 麻生路郎選

十字架を胸にナースのアイシヤード 一 鶴
十字架を背負わされて悲壮がり 静馬
童貞の首に十字架ぶらさがり 生 薑
十字架を心に負うた不遇の日 柳宏子
初キッス胸に十字架さげていた 阿茶
後添いは十字架背負う座となりぬ 榮
十字架の重さに耐えるだけの首 客遊子
イースタに怠け者は気がひける 判 志
十字架をつつてドライなことも持ち 庸 佑
十字架をアクセサリーにして春を売り 和 郎
十字架を仲人にして恋みのり 雄 声
転落を胸のクルスに支えられ どんたく
十字架の手前二次会ともいかず 野迷路
インテリと自負十字架を胸に 光 道
十字架を負うてこの子の松葉杖 多久志
鐘の鳴る丘に十字架夕やける 圭井堂
死刑囚もう十字架を悟りけり いさむ
銀紙のでかい十字架お伽劇 八九寸
十字架が外人墓地の露にぬれ 紫 香
十字架を背負い獄舎で歌をよみ 瑞 歩
十字架を背負い悲しい顔もせず 圭 水
十字架のさそいにのらぬ釜ヶ崎 あきら
十字架を崇め貧しく美しく 晃
十字架へ希望大きくもち直し 季 賛
十字架を指し踏絵に思い切り 専 翁
十字架を胸にキッスをきたなかり 柳 志

兼題「駅」 中島生々庵選

十字架へゼニには遠いミサの鐘 真 砂
十字架の屋根の下にも現実が 多久志
首飾りの十字架に冗談言いきり 柳宏子
十字架を背負うた同志信じきり 生々庵
日雇いの胸の十字架汗にぬれ 和 郎
十握りしめて男の意地を断ち 万的
牧師にも十字架まぶしい時があり 阿茶
十字架の下に名も無く眠りいる 路 郎
十字架胸にすましてる姉 路 郎
各停の駅に追い越し待つ長さ 八九寸
駅呼称はつと気付いた乗りすこし 句念坊
停車位置よく知り担ぎ屋たむろする 光 道
毎度ご乗車有難うそうな声でなし 文 子
買出しと早出に改札朝となり 繁太郎
花の雲リフトの天使駅へ降り 生 薑
駅駅を子供は一字ずつに読み 十 悟
駅長も草引きしてる 田舎駅 季 賛
新駅に臭い政治の匂いがし 一三夫
駅前に住んでしみじみ世の移り 多久志
降りる駅車掌に頼んでねむる酔 尚 史
改札の上でつばめの子が育ち 柳 志
内職の手をやめ駅へ迎い傘 梅 里
それぞれの思いで座る駅の椅子 晃
故里が駅の手袋でやつと知れ 野迷路
駅を出た辻でも一度地図を出し 紫 香
駅前へ来てからことすけ思い出し 庸 佑
鯛めしがうまい駅だと買わされる いわを
終電へ駅の夜霧がまといつく 晃
涙もろい母を駅まで送らせず 静 馬
旗も振る駅長が居て無事故なり 梅 里

兼題「美名」 戸田古方選

白砂青松夏だけ停まる駅という 榮
転落の始発となった上野駅 庸 佑
名物はないが汚職で知れた駅 正 一
仲人は駅まで行かぬ気を利かし 春 菜
途中下車駅には内緒の人が待ち 阿茶
見捨てられたようじつそり通過駅 繁 雄
タクシーで来て小一時間駅で待ち 春 菜
駅出来る話たんぼへ眼が光り どんたく
駅前で傘借れるほど顔が売れ 梅 里
旅景色駅のポスター程でなし たねお
駅ごとに旅に不馴れの首を出し 文 秋
故あって駅に見送り出来ぬ 生々庵
チヨットした美名が記事を派手にする 季 賛
こんなことが美名の記事になっていた 季 賛
うろろうと美名求める齢になり 光 道
美名得るために醜聞撒き散らし 専 翁
美名売るために醜名買うて出る 専 翁
からかい美名に胸を張る無邪気 八九寸
よぼよぼになって名譽な名をもらい 文 秋
トップ屋に金握らせて得た美名 清 人
人の気も知らずに美名にこっちあげ 圭 水
人情は美名の裏を知りたがり あきら
だんだんと美名にかくれをこ覚え 柳宏子
国宝の美名雨漏りする庵 阿茶
人気と言う美名のもとに無理をさせ 阿茶
美名押し付けたりやおだの効く御人 十 悟
マスコミに乗って美名の泥臭さ 生 薑
美名をばちやばや言われ嫌になり いさむ
無理をした美名金と共に去りぬ 野迷路
マスコミががやがやうるさい美名 紫 香

美名売る世話とも知らず礼を言い 尚史
 寄付と言う美名で税金のされる気 雄声
 名刺に書くだけの美名で嬉しがり 生々庵
 落ちぶれてからは美名もてあまし 文秋
 結婚の美名に女弱かりき 雄声
 お手当の薄さは美名で埋め合わせ 生々庵
 邪魔と言えず顧問に祭り上げ 正一
 美名をそろそろ持ちこたえられず 客遊子
 ほこほこと美名の裏で泡が立ち どんたく
 美名ゆえゆつくり病氣もしておれず 瑞歩
 貧者の一灯美名晋し 八郎
 迫害を受けた故郷で祀られる 晃
 ギリギリに生きて美名も悪名も 古方

兼題「半分」 黒川紫香選

話半分聞いてのみこむお人好し 一鶴
 金語り工事半分だけでチョン 繁太郎
 半分は借金ですと誇らしげ 光道
 半分は嘘と知りつつ買ってみる 句念坊
 半分も喫わず口紅つけて棄て 専翁
 諸経費の半人件費に食われ 季賛
 半分はうつつで歌う子守唄 あいき
 よろい戸を半分開けて朝の社歌 文子
 だらしく月半分は家を明け 黙平
 話半分聞いてもケタが違ひすぎ 柳志
 話半分聞いてもなと引つかかり すすむ
 手相見に顔と手を半々に見られ 行人
 半分はうそでも筋は通つとり 正一
 半分に聞いても景気の良い話 あきら
 半分はウソと知ってる聞き上手 一三夫
 半分も言えずお悔み帰って来 静馬

半分は食はずに折りで子のみやげ 一三夫
 半分になった斜陽の家の土地 黙平
 半分は本音吐いてる愚痴話 葉
 半分はお前が悪いことにされ 多久志
 半分は給仕も兼ねて女事務 あきら
 半分は残すつもりは札くずす 古方
 半分は消えてしまった月給日 圭水
 あと半分蟻一匹が菓子運ぶ いさむ
 半分は手形半分は踏みたおし 生々庵
 仲裁にはいつて半分のろけられ 和郎
 おばあちゃん半分貰って倍返し 阿茶
 半分は妻の甲斐性で家が建ち 清人
 上の子は半分ずつが気に入らず 阿茶
 半分ずつしいやと千円札でくれ 尚史
 半分になつてもみみずまだ動き どんたく
 半分も食わない洋食下げられる 静馬
 当たら半分やると宝くじ 雄声
 姑は半分きこえる耳をもち 葉
 半分が帰つてしもてから騒ぎ 紫香

席題「同居」 西尾 葉選

絶叫をしてみとなった同居人 古方
 同居せず小遣いだけは取りに来る 静馬
 面当てがだんだん同居こたえき 柳宏子
 同居して瓦斯と電氣と水で揉め 梅里
 栄転は思わぬとこへする同居 季賛
 信じ切つて居たと同居して崩れ 生々庵
 兄の守りに親と同居がしたくなり 静馬
 用心棒のつもりで同居承諾し 圭水
 同居して血は汚ないものと知り 梅里
 同居者と犬にもやつと認められ 春巢
 名をなきぬ頃の同居のなつかしき すすむ

同居してみれば案外お人よし 古一方
 同居してから肉親にミソが出来 一三夫
 同居してうっかり本音吐いちゃい いわを
 同居した日から留守番頼まれる 圭水
 老いらくの茶飲を及なちとして同居 清人
 同居人我慢出来ない癖があり 多久志
 うるわしき家庭で同居好まない 真砂
 同居人美し過ぎてもめており 庸佑
 実権がまだ姑の手にある同居 晃
 釣つて来た小鮎は金魚と同居 舟遊
 同居人と言うが世間は知つ居り 圭井堂
 同居して若いつばめと間違われ 柳志
 同居人の方が郵便多く着き 柳志
 同居人にしては言葉が承知せず 圭井堂
 同居人の爪の黒さが気にかかり 夢虹
 老悲したら一回しの同居する 瑞歩
 産月を抱えて同居気が疲れ 文秋

席題「アイデア」 西 いわを選

アイデアはよいがと軽くあしらわれ たねお
 赤字とは言わずアイデア募集する 圭水
 アイデアが玩具の店にまで溢れ 和郎
 アイデアの夢突飛す入り入れられ 阿茶
 アイデアをはめつ握りつぶされる 圭井堂
 アイデアへ欲がからんだままつぶれ 清人
 直ぐ廃るアイデアでよし儲ける気 眉水
 思いつきでよいアイデア求められ あきら
 アイデアでひよいと浮んだひよこ 打ち 晃
 商魂の又アイデアを盗まれる 柳志
 アイデアはよいが予算が儘ならず 圭井堂
 殖輪から得たアイデアにある人気 進之助
 アイデアを売るアイデアで儲け出し たねお

37年度全出席者(五月現在)
 和男・圭井堂・一三夫・文秋・清風
 ・すすむ・柳宏子・薫風子・庸佑・
 静馬・生々庵・舟遊・梅里・阿茶・
 雄声・いわを・季賛・宏子・霞乃
 天位受賞者
 ⑤文秋④生々庵③水客②三司・圭水
 ・好郎・静馬・圭井堂①恒明・一瓢
 客遊子・一三夫・雄声・庸佑・柳志
 ・白柳・阿茶・晃・葉・和郎・梅里
 不朽洞賞杯受賞者
 圭水・一瓢・圭井堂・静馬・文秋

デザイナー正倉院で借りた知恵 進之助
 漫画家のアイデアはもう月に住み 満秋
 アイデアへ妻の意見がすまじい 紫香
 アイデアをBGからもかってやり 客遊子
 アイデアのヒントを寝床の中で知り 生々庵
 アイデアが奇抜すぎて思案する 庸佑
 アイデアを賞めて協力せぬつもり 生々庵
 思い付き夫人のアイデア釘を打ち 舟遊
 妄想狂のアイデアが素晴らしい 満秋
 アイデアはみんな社長のものにされ 多久志
 アイデアは金のことまで考えず 晃
 アイデアどうあるとも合うた服 舟遊
 素人の方がアイデアよく見付け 和郎
 アイデアはポイントを造ることにする いわを

席題「目葉」 若本多久志選

目薬の想い出母が乳しほる 客遊子
 あんたのは目薬であかん老眼や 八郎
 目薬の涙と見えぬ演技なり 瑞歩
 目薬の涙で 女優の大写し 一三夫
 目薬もむかしむかしは貝でした 眉水
 夜更しも目薬だけで済む若さ 文秋
 麻雀へ目薬用意してでかけ 圭水
 一二次して目薬もう忘れ 柳宏子
 目薬もひとりて差せぬ大男 静馬
 飲んで効く目薬のたよりなし 梅里
 二階から目薬程のくじ当り 文秋
 目薬をさしてテレビの座にもどり 葉
 女はさんがさせば目薬目に入り 古方
 目薬にまでもビタミンコーシヤル 清人
 特売で買った目薬効かぬらし 圭井堂
 目薬をポケットにハンサム夜が好き 清人
 目薬にもライバルがありPR 進之助
 よくなった眼へ目薬は忘れ勝ち 季費
 目薬を効かせて涙の大写し 生々庵
 七分どこ残って目薬忘れられ 紫香
 目薬をさして夜なべのミシン踏む 晃
 孫からの便り目薬りさして読み 青風
 ビリっとしゅまめ目薬物足らず 進之助
 目薬も七ツ道具の数に入れ 柳志
 目薬をさして五本の映画見る 和郎
 目薬のようにポツチリ出た賞与 柳宏子
 肩もこり目薬もさす十二月 清風
 目やに一ぱい目薬までが汚ならし 柳宏子
 目薬もいいもの妻の膝をかり 生々庵
 差し残し目薬寝棺に入れてやり 泰泉
 目薬にも頼りお不動さんにもたより 梅里
 目薬をさすだけの診療券 多久志

(庸佑清記)

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

プロ野球マスコットに負けて高校生 らつきよ
 側近の野心がプロへ踏みきらせ 珠笑
 パチンコで勝った時だけプロ気分取り 京四郎
 うぬぼれて居てもプロから振りむかず 文秋
 はしご酒空弁当を大事そう 守信
 行き帰りに弁当だけの靴さげ 宇佐夫
 弁当をひろげたところへ法界屋 義介
 紫が好きと云う娘の白い指 清子
 ウインドの色客の心をもてあそび 一栄
 紅裏が気になるころの更年期 風仙洞
 大学で赤旗振るのだけ覚え 井平
 墨色へすがる瞳はまばたか 柳宏子
 衣更えこれは質屋を知らぬ服 正一
 衣更え電車が少しすいたよう 章子
 衣更えしみに昔の夢を追う あいき
 恋を得た背広の疲れ衣更え 珠笑
 肩の癢りだけでも違う衣更え 白柳
 食欲のない娘の変化母気付き 水京

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

忘れものして道草がばれてくる 柳宏子
 敗戦と言うどさくさにのしあがり 梅里
 政変のチャンス握つてのしあがり 清風
 どさくさへ記者は塀を越えてくる 生薑
 どさくさで刑事もプロが来てしま 恒明
 何時来ても丁度切れ目と出ない酒 正一
 あきらめもせず予備校の新学期 好郎
 新学期となりの顔はちがう顔 素行
 新学期までまづ気胸の破れ縫う あいき

川維 淀川支部句会 (大阪市)

木村水洞報

仲よしをばらばらにして新学期 文秋
 小使も髭を剃って 新学期 葉光
 思い付きよいが実行ともなわず 双葉
 負けてから詰め手次ぎ次ぎ思いつき 圭井堂
 思い付きよいが資金のメドつかず 一三夫
 もうからぬ事ばかりを思いつき 白柳
 ここからはひとす道よと連れはなり 寿美司
 一筋の道をあゆんだ生字引 光福
 一筋の腰繩しゃばと縁が切れ 生薑
 妻子ある身をひとすじに暮れる 静馬
 流行らない道一筋を大事がり 十悟
 マスコットが芸一筋に生きさせず 清人
 正直一筋底辺に生きてても 恒明

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

カーブのひとゆれ片足戻って来 一
 すし詰も楽し舞りに美人居り 三十郎
 すし詰のバスを見送る岩田帯 東洋男
 スタートが昨日のような停年期 礼司
 スタートへ親類中の智慧をかり 水洞
 ただ乗りもこの春限り幼稚園 生薑
 無料サービスセンターのような眼で見られ 花村

見送った心空虚な帰り道 万里歩
 子沢山見送るあとの家ひろし 静紀
 困いもの見送りにまた人の影 よし子
 アロハオエ母はより添い送るキャス 静松
 見送りの面目私なる握手 笑有
 見送りの嬌声映画スターらし 須磨子

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

6月号発売中 150円 (〒18円)

- 冷凍食品界展望 (現状と将来一国内)
- 冷凍食品の海外情勢
- 冷凍食品製造上の問題点
- 冷凍食品の販売装置及び組織
- 冷凍食品の特徴と使い方

特集

衛生検査の管見
 食品工場品質
 食品工場の衛生
 食品工場の衛生

- 海外ニュース
- 特許ニュース
- 意匠ニュース
- 商標ニュース

【展望台】主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

食品と科学社 大阪 6702番
 大阪市北区 区5-4
 大塚 361-9373

左様なら見送る人のさびしそう カロ女
 餞別を無言で渡す飛行場 暁舟
 機故障見送りのびて風邪をひき 平八郎
 水別と知らず見送る子は笑い 弦月
 見送るもタラップまではついでき あき坊
 見送れば行って行きたい気にもなり 内海
 見送りのテープに未練残して来 萩路
 見送っていつそう案じる母性愛 泉水
 ホナムーン見送る母の瞳がうるみ エス子
 見送りに義理で来ている無駄話 柳葉
 見送りのいと味気なし空の旅 斧平
 見送りに来て御無沙汰の友に会い 浅太
 湯の町の見送り受けて朝のガス 押山
 レイ一ついらぬ見送り気も軽く 快夢起

川維 京都支部句会 (京都市)

田中烏雀報

浮気がしたいばかりに妻にあたり 禎一
 ワリカンで飲もうと浮気同志言う 紫蘭
 塗りがえたボートの腹に桜ちる 尚平
 中庭へ出て耳打ちの智恵となり 司郎
 匿名の寄附の絵本と精薄児 烏雀
 匿名の善意を記者は追い廻し 生薑
 テーブルのコップ踊らず黙舌権 和三郎
 夜ざくらへまぎれて踊る母若し 紅寿

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

誤字多い祝辞名文句で読まれ 蛙眠子
 伯母が来て父の命日思い出し 一机
 荒壁が子の婚礼へ上塗られ 素瓢
 一年に一度見に行く花を待ち 一保
 通動車人それぞれの週刊誌 鶴丸

愛情が独占欲となって妬き 雄々
 砂の丘清の画法真似てみる 天邪鬼
 金が出来名譽と地位の欲が出来 詩郎
 敗北に似た転動の汽車に乗り 喜夫
 栗はど名菓案外うまくなし とみ子
 商売をはつたらかして見る野球 まさよ
 退職の刺るには惜しい髪を撫で 明甫
 末っ子をかばってくれる母の背な 八歩

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

水入らず故郷の味はあたたかく 博友
 水入らずさんまも鯛の味で食え 宗義
 水入らず昼までねてる日曜日 竜泉
 水入らず押売りまでも遠慮をし あやめ
 水入らず誰ればばぬ欠伸をし 秋月
 緑日へ行くことにした水入らず 久米雄
 水入らず遠慮のいらぬぐちを言い 一声
 水入らず何か御馳走したくなり 照路
 一日がとて短い水入らず 三六
 里の母が来て水入らず引き締める 桃里
 割り込んだ養子でもある水入らず 胡風
 晩めしがこたって済んだ水入らず 美舟
 しんのある飯を笑える水入らず 東岸
 山の春かけひの水もぬるんで居 伊久野
 絵にもなり唄にもなれや春がすみ 芳月

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

自家用車とばし花見の桜土手 きみえ
 桜土手バスがもたつきながら抜け 柳心児
 来年は家族連れでと桜土手 舟帆
 花吹雪浴びて近づくと桜土手 古坊

せせらぎの音に晴れゆく桜土手 祥月
 五分咲きへ未練残した桜土手 英城
 ポスターに嘘はなかった桜土手 舞吉
 本堂は編物教室並ぶ下駄可 明
 本堂へ風がもて来る花の声明 朗
 本堂の広さ毎朝丸く掃き 佳仙
 本堂の木魚も聞いた花だより 好江
 本堂の古さへ誂経も有難く 方正

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

アンチも立たぬ同志で好い隣り 竹比呂
 干物が飛んでから隣りと口を聞き 勝子
 大猿の仲の隣りの娘を恋い 健一
 お隣りへ来た電報で起こされる 勝喜
 子の欲しい隣りへ子をあすけとき 光明
 夜をつとめ何の噂もない隣り 八重子
 隣りから嫉妬な噂を聞いてくる 誠水
 人並みに見せる背丈のハイヒール 三郎
 人並みに妻も要らず金をため 利子
 ほはなでる風にも春の匂いがし 常香
 バラソルに噂くるる春の風 天花
 倒産の種突 寂しい春の風 寛
 或る日ふと死んだる後を考える 松風
 炊事場へ逃げて尾を引く口けんか はる江
 誘惑を女にされてついてゆき 勤

川維 岡山支部句会 (岡山市)

水松東岸選

随行の方は気ままに羽根をのし 七面山
 随行へ目録で社長は用を足し 三平
 随行は酔ってはならぬ酒を飲み 哲郎
 随行の出来ぬ不平が妻にあり 伯ん坊

随行に妖しい女秘書も居り 胡風
 随行がライターを出すタイミンツ 桃里
 随行の急行券は自費となり 秋月
 随行の能態が板に付く笑顔 美舟
 随行の前宣伝はくをつけ 博友
 随行の方まで警備届きかね 佐加恵
 随行の秘書がげん眼で見られ 一声
 随行の顔が少し唇に落ちず 芳月
 随行にまかしてしまった罽財布 一郎
 随行がわりとうるさい初巡視 照路
 無口さを買われ随行命ぜられ 草二
 強いられた随行恐る恐る 飲み 久米雄
 随行が仕事してきた使節 困 宗義
 随行は一日遅れて風邪を引き 桃里
 随行は三つへだてた部屋で飲み 米男
 随行が金魚のふんに似て 続き 東岸

川維 大鉄支部みなと句会 (神戸市)

植村客遊子報

履歴書を預かるだけ感謝され 白溪子
 地についた若葉をむしりもり恋 初甫
 寝をべって芝生は雲を見る 処 杜的
 勉強をさせるムードに母がする 客遊子
 手をつなぐ子等の散歩は歌となり 賀人
 修道尼の散歩へ枯れた道続く 万的
 煤ほこり鴨居の上の感謝状 季笑
 室いっばいに夜のムードをたたくせ 季贊
 ムードがなまらぬ娘と女は背を見せる 有法子
 非常口ひそかな恋がそと開け 美由紀
 どたん場へきて口笛の音が湧える 水密

杏林川柳会 (大阪市)

中島生々庵報

他校の奴ばかりがゴールへ入って来 五十六
 もめぬいてゴッセンした二階借り 小石
 ゴールイン無理がたつた不起の客 一哲
 手不足でできた腕が物をいい 野迷路
 手不足にうっかり乗った口ぐるま 阿茶
 手不足の間女房にしておく気 生々庵
 祝言は真似ごとあすは鹿島立ち 霞乃
 男手でおむつしかえらぬ見られ 路郎

大阪逓信病院川柳会(大阪市)

橋本幸男報

指一本かけて国宝 大きわざ 愛論
 指見せて手品 小これから 春巢
 指輪まで送ったはずが離婚 幸男
 親切も人格があるむつかし 宏子
 何げなくした親切がよろこばれ 露兒
 儲け話無口 一番よく喋り 春雄
 金儲けする程だんだんケチになり けい女
 金儲け持って死ねない金を蓄め 夏生
 逃げ腰の松三景に 数えられ 草右
 逃げ腰で居るのも知らず責いでる 竹青
 高校生逃げ腰で母の小言きく ハナ子
 逃げ腰でマダムの化粧 極めて見る まさる
 落ついて飲めと逃げ腰とめられる 竹荘
 もがきつつかバカバカと女いう 風仙洞
 停年へ悪友なりの親切さ 平男
 逃げ腰のマダムいよいよランとする 路郎

南海電鉄川柳会(大阪市)

辻圭水報

弱い奴高飛車に出て恥をかき 山岡
 暖房器寒がりにした罪をきる 宏子
 脱線は労組過勞にしてしまい 句念坊

脱線だなんて本人思うてず 雄声
 脱線をして上役をこきおろし 和郎
 脱線のスリル覚えた恐妻家 狂二
 脱線の多い講義で 人気よし 尚史
 脱線ばかりで人生も終り近く 圭水
 ベバ脱線外に 妹が又一人 八郎
 社用なのに又脱線かと訊かれ 路郎

明和研究会(西宮市)

樋口舟遊報

一本杉へ祈りをこめて旅立ちぬ 青風
 聖堂に折れる響 冨え渡り 悠紀
 僕は弱虫キリストへ祈るはかなし 舟遊
 マルクスの君が仏に 何祈る 弦月
 祈る声いつか鳴咽になつて 晃
 養子ひそかにアーメンを守るなり 新子
 望郷の一とコマのある映画館 梅志
 ハイヒール穿いて群集かきわける 大丘子
 逃げるように土座はそっとおいて去に すゝむ
 釜ヶ崎世相の裏にある 世相 生薑
 太陽はあの日そのまま原爆忌 静馬
 灼ける日へ生きねばならぬ日雇夫 六竜子
 あばら骨屋根へ透ける昼 和三四郎
 買った方も骨じやまになる日あり 敬太
 骸骨を睨み 清張 思索する 太路
 人間のにやること 草人

富柳会句会(富田林市)

阿部柳太報

しのびあいレールでかくす駅の前 正倫
 駅前でバス一時間待つ 長さ 静林庵
 さくら花春のおどりの O S K ふじ
 七分咲桜の下でスキすき好き 美代

梅済んで桜で 稼ぐ土産物 とも子
 世智辛い世に桜だけ派手に咲き 紅月
 フジサクラ芸者へ青い目のレズ 呂人
 舞台今さくら吹雪へフィナーレ 六竜子
 咲けば散る桜の運命短かくも 八郎
 およろこび云いにくおま十人目 勇三
 出産にババまで神に手を合わせ 登
 赤子抱くマリアに見えて今日の妻 吉太郎
 あんな子が落ちて あんな子がかり 東雲楼
 ビッチャーで入学難で広き門 幸吾
 入学の今日からリストにも書かれ 尚史
 入学の若勞も忘れ赤旗を振り 周一
 入学に兄の業行も引出され 摩天郎

333 川柳会(堺市)

杉前南宗報

反対が私と彼をつよくさせ 務
 賛成より反対意見に耳をかし 八郎
 反対の声はうしろの席を占め 貴山
 ちよほよほの自慢話をそばで聞き 狂二
 骨抜きにされて男の朝帰り 南宗
 春うらら中身はお骨の忘れ物 雄声
 今生に残していったのだ 仏生 薑

羽曳野句会(羽曳野市)

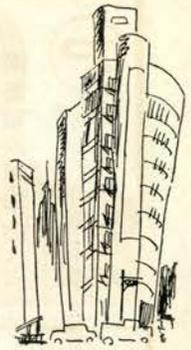
松川美郎報

灸すえに行く人もありバスゆれる 雄峯
 挨拶の半分バスがもって 行き 与太郎
 発車オーライ 込み合う窓に花吹雪 太甫
 景色よりバスのガイドのいいとれ 恵
 クレオラを持たせばバスの絵電車の絵 紫貞
 崖上のカーブに奇声観光バス 蓮太郎
 オンボロバス居ねり出来ぬ田舎道 夕月

満員のバスが戻って村まつり 静波
 踏切りに唄声のせてバス止まり 真青
 うぐいすの声も身近に観光バス 千秋
 花嫁も乗って田舎のバス 兼し 青山
 何んでも屋軒にバス 停む旗を吊り 晴嵐
 老鷲も黙る美声のバスガール 痴亭
 揺れるバス裾から女春散らし 幸平
 終バスの時間を聞いて行商人 宝泉
 タクシーを横眼ににらんでバスにのり 頑柳
 春装の見舞客乗せバスは着く つた子
 面会が来んかとバスが気にかかり のん子
 花見時すれちがうバスも 酔うており 千草
 珍らしい土産あれこれバスはぐれ 花風
 よくゆれるバスに二人はうれしそう 伊佐義
 運転手後のグラマー 気にかかり 誠一
 バスガイドうっかり客へ腹が立ち 計雄
 バスガイド名勝負跡を歌にのせ 力郎
 母ちゃんのレジヤに覗くバス文庫 弥生
 見学もバスで済して酒になり 美郎
 大阪の夜を見直すバスに揺れ 太柳

酌よし 千日前大劇裏 TEL②七二〇
 味よし アベノ橋近映地下 TEL⑦〇一四七

梅里の店 **大萬**
 ★大万川柳(第百三十六回)を募る
 兼題「帳消し」 路郎先生選
 締切・六月十五日 五句以内
 発表・六月廿日 (店内掲示)
 投句先 阿倍野区松崎町三ノ〇
 大万川柳会宛



柳樽室

路郎生

★僕のシーズンが眼の前に来た。僕のペースデーは七月の十日だが、本年は川柳祭を予告通り七月八日に天王寺本坊で賑やかにやってくれることになった。感謝の外はない。昔から僕はみな顔を見るのが一番楽しいのだから万障も億障も繰合せて来てもらいたい。

★五月二十日に阿倍野支部で豆萩忌を修してくれたので出かけた。早いものだ、もう一カ年になる。彼の句を募うものが多数に集った。句はその人なりで、いい句は削っておきたいものだ。★僕は二、三日後に新大阪ホテルで空の英雄ガリリン氏を迎えることになっている。私の家へ一瓢君が猫をとどけてくれたのが恰度ガリリン氏が宇宙人として世界に名をはせた時だったので、記念にガリリンと命名し愛称をガーチャンと呼んでいる。近ごろでは豚のように太って偉大な存在だ。この前の猫はシャレの好きな劇作家で川柳人であった食満南北の句碑が堺の南宗寺に建碑された日にもあったので

ニャン北と命名したものである。こんな話をガリリン氏に談す機会は多分なからうと思うが、たとえ談しても、このユーモアは判ってはもらえない。しかし、私なども昔から天地人に生きている人間だから、どっかで交又する神経があるのではなからうか。

★僕は当分、ガリリン氏と直角に平地の旅で満足するつもりだ。たとえ平地でも川柳眼が鈍らなにかぎりは愉しみは無辺に

募るを告舞見中夏暑交換人柳

川柳雑誌社

- 八月号へあなた
- の暑中見舞広告を
- ★一口金二百円。幾口でも申し込んでください。
- ★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
- ★一口分は五分の一段組三行。
- ★原稿締切は七月八日着便。
- ★広告料は前金のごと(郵券代用でもよろしい)

広く、無尽蔵に深いものと負けおしみを言っておこう。この七月には招かれて青森へ行くことになった。日本海の海の碧さに久しぶ

りに接する欲びは大きい。帰路には東都の柳人の顔が見られると思うと、これもよろこばしいのである。僕のシーズンは初夏から初秋までだ。だから旅はこの間と云うことになる。

▼ペンの散歩

▼前号も好評だった。こういうお声をきくと編集局一同さらにファイトがたぎるといふものである。

▼路郎、腹乃両先生もますますお元氣である。きょうなんかも酌しつ酌されつ、旅行や踊りのおはなして「お若いなあア」とこっちが感心してしまった。「まだ青年だよ」と、おっしゃるから、ボクらも少年のつもりでガン張らにやあなるまい。

▼「川柳の形式について」この魅力執筆陣にはキッソト満足が得られることとおもう。体質改善是非か、おとなしい文章の中にも、秘められた火花を感じるものがある。

▼前号東野大八氏の「ある日のふんにようだん」は会う人々から好評のことばをきいた。内容そのものがすでに川柳になっている名文筆はさすがだとおもう。

▼座談会も受けた。これからはときどき目新しいものを催していきたいとおもっている。

▼いよいよ川柳まつりも近づいた。出句メ切が今月末になっていきますが早い目に本社へご送句ください。川柳のビッグ・ホワイト征服者は七日八日に決まるのです。▼サテ、暑中見舞いのシーズンで

すが今夏もよろしくご協力のほどを。とは広告部の弁でございませう。

(一三天)

六月句会—川柳支部

- ★淀川句会・4日(月)六時、題メンツ・梅雨・より道、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局。★明和研究会句会・10日(日)一時、題窓・選挙・苔・所、阪神電車鳴尾駅下車東南二百米鳴尾公民館。
- ★米子句会・3日(日)一時半、題、窓・はだし・写す、所、西伯町役場、会議室。★京都句会・16日(土)夕、題、木乃伊・恍惚・断面・徽、所、四条繩手仲源寺。

- ★みなと句会・25日(月)六時、題、常識・人生・隣、所、神戸市生田区東川崎町一ノ五三國鉄神戸職員集合所。★阿倍野句会・20日(水)七時、題、地味・思案・葉・コメデアン、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万。★玉造句会11日(月)七時、題、悩み・字・時間、所、市電玉造南百米西側大阪信用金庫玉造支店。★かがみ句会・2日(土)夜、題、税務課・手・割引・農桑・名言、所、池田古心居。★宇都句会・3日(日)十三時、題、明細・習う・レール・遊説、所、津秋六花宅。

川柳雑誌社主催

本社六月句会

日時 六月七日(木)午後六時
会場 自安寺(211)一四七八番)
大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題 「銘 柄」(二句) 麻生路郎選
「アイデア」(三句) 清水白柳選
「散歩」(三句) 松江梅里選
「廃 品」(三句) 吉田圭井堂選

席題 三題(当日発表) 戸田古方

柳話 呈賞 ★各題天位・☆各題天位から路郎選に
より不朽洞賞

会費 百円

★投句だけの方は郵券三十円
同封(メ切六月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地

川柳雑誌社

電・大阪側六〇八一



P
大日本製薬

サンプル・説明書贈呈 (雑誌名をご記入ください)

神経生活者の胃の薬

★健保適用

〈新発売〉プロバンM錠

10錠200円・30錠550円・100錠1,430円

大阪市東区道修町 大日本製薬株式会社 (プロバンM係)

会長・麻生 葎乃 女史

入会希望者は往復はがきで……

川 婦 人 友 の 会 会 員 を 募 る

連 絡 事 務 所 大 阪 市 南 区 ニ ッ 井 戸 町 23

川 柳 雑 誌 社 内 川 柳 婦 人 友 の 会

山 川 阿 茶

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した/今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す/ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る/凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

★ご送金は振替口座をご利用が便利です。(切手代用可)

風流 人間横丁

東野大八著

B6型 二五八頁
価 250円
送費70円

川柳 親ごころ子心

若本多久志著 麻生路郎序

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳傳の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る裏に有意義な書である。

価 150円
送費50円

詩川柳考

B6型函入 定価三百八十円 送費九〇円

高鷲亜鈍著

川柳雑誌社

振替口座 大阪 75050
電話 本 阪 (671) 6081

発行所 大阪市住吉局区内 万代西5丁目25

Printed in Japan

発行所 **川柳雑誌社**

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
電話大阪(777)716081
振替口座大阪 七五〇五〇

募 集

課題吟募集

抜け道 (十句以内) 土井文蝶選
影法師 (十句以内) 後藤梅志選
つふし値 (十句以内) 国弘半休選
PTA (十句以内) 正本水客選
料理屋 (十句以内) 石川侃流洞選
近作柳傳 (兼俳句以外) 橋高薫風子選
川柳塔 (兼俳句以外) 麻生路郎選
文 章 (評論・研究・感想其他) 北川春葉選

毎号募集 (毎月十五日締切)

投 稿 規 定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼ 「近作柳傳」は一般作家の雑吟を募る。

▼ 「課題吟」は誰でも投句が出来る。

▼ 「川柳塔」の投句は不朽会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌

第三十七年 第六号

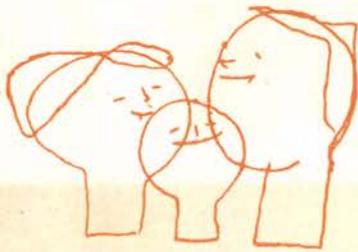
定価 九〇円 (送料六円)

半力年 五七六円 (半力年) 共
一力年 一〇八〇円 (半力年) 共

昭和三十七年 五月廿五日印刷
昭和三十七年 六月一日発行

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
行印刷人 麻生 幸 二 郎

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる

高単位総合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-S

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

麻生路郎著

好評噴々

新川柳観賞

川柳の味わい方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方が
がなかなかうがって、一気に
読ませる魅力がある。

大阪府住吉区四丁目五番五号

発行所

川柳雑誌社

電話大阪(67)六〇八一
事務所大阪 七五〇五〇

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価二五〇円
送費七〇円

川柳の作り方と味わい方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 **川柳雑誌社**

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿七年六月一日 発行 毎月一回一日発行

川柳雑誌社

定価九十九円

定価九十九円